

乳幼児療育研究

北海道乳幼児療育研究学会



第 38 回研究大会集録

大会テーマ

「わからなさ」に向きあう Ⅲ
～「家族個々の歴史」を聞き取り、そだちの物語にふれる～

記念講演

「家族個々の歴史」から、そだちの物語にふれる

交流会型 トークセッション

分科会 1 【保育】

分科会 2 【トークセッション】

会則など

ISSN 2435-2179

2025 年・第 38 号

乳幼児療育研究 第38号 目次

第38回研究大会 集録

大会テーマ 「わからなさ」に向きあう III

～「家族個々の歴史」を聞き取り、そだちの物語にふれる～

<記念講演>

「家族個々の歴史」から、そだちの物語にふれる

講師 日置 真世 (フリー) 4

座長・まとめ 佐々木浩治 会長 14

<交流会型 トークセッション>

テーマ「物語」の話題提供を呼び水にして、自由な対話で学びましょう。

1 当事者の話から対話により学びを深める部屋

話題提供 佐々木恵祐・三輪彩水

座長・まとめ 日置真世 (フリー) 15

2 保護者の話から対話により学びを深める部屋

話題提供 松崎享子

座長・まとめ 細谷優子 (あしよろ子どもセンター) 18

3 支援者の話から対話により学びを深める部屋

話題提供 佐井川友美 (当別町子ども発達支援センター)

話題提供 山本恵里加 (芦別市子ども発達支援係)

座長・まとめ 玉手美和子 (児童発達支援・放課後等デイサービス きらりこ) 22

<分科会1 保育>

| | |
|--|--------------------------------|
| 「ある親子のそだちの物語」からあらためて自身の日々の保育・療育を振り返る | |
| 「親子のそだちの物語」 | 野島 彩 (保護者) 27 |
| 「ある親子のそだちの物語から、現場からの視点」 | 中村 孝博 (NPO 法人にしのみさと) . . . 30 |
| 「『ある親子のそだちの物語』に触れてあらためて保育者・療育者が自問すること」 | |
| 柿原 勝 (NPO 法人にしのみさと)・愛下啓恵 (札幌国際大学) | 33 |
| | 座長 愛下 啓恵 (札幌国際大学) 38 |

<分科会2 トークセッション>

| | |
|--|---|
| “保護者支援”について、様々な立場からの眺め、考えを持ち寄り対話ミーティング | |
| 医療の立場から | 佐々木美春 (むすびめ) 39 |
| 福祉の立場から | 山口 麻絵 ((福) 静内ペテカリ こどもサポートほっぷ) 43 |
| 教育の立場から | 久保田 健一 (江別第一小学校教諭) 44 |
| 当事者の立場から | 大木裕介 48 |
| | 座長 北山 竜大 (たくあいアクティビティ「むう (夢)」) 51 |

| | |
|---------------|--------------|
| 北海道乳幼児療育研究会会則 | 52 |
| 役員 | 54 |
| 乳幼児療育研究 投稿規定 | 55 |
| 編集後記 | 58 |

個々の歴史、そだちの物語にふれるための前提

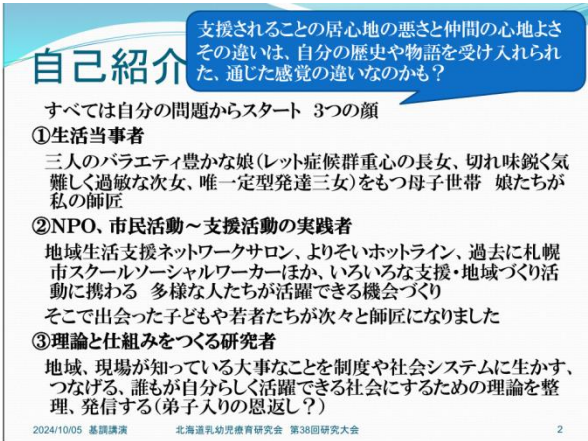
～若者たちが教えてくれた「見えない当たり前」について

日置 真世

フリー

自己紹介と活動紹介

私には、①生活当事者（重度障がいを持つ長女を筆頭として、個性豊かな3人の娘の母）②NPO、市民活動～支援活動の実践者③理論と仕組みをつくる研究者の3つの顔がある。



自己紹介 支援されることの居心地の悪さと仲間の心地よさの違いは、自分の歴史や物語を受け入れられた、通じた感覚の違いなのかも？

すべては自分の問題からスタート 3つの顔

①生活当事者
三人のバラエティ豊かな娘(レット症候群重心の長女、切れ味鋭く気難しく過敏な次女、唯一定型発達三女)をもつ母子世帯 娘たちが私の師匠

②NPO、市民活動～支援活動の実践者
地域生活支援ネットワークサロン、よりそいホットライン、過去に札幌市スクールソーシャルワーカーほか、いろいろな支援・地域づくり活動に携わる 多様な人たちが活躍できる機会づくり
そこで出会った子どもや若者たちが次々と師匠になりました

③理論と仕組みをつくる研究者
地域、現場が知っている大事なことを制度や社会システムに生かす、つなげる、誰もが自分らしく活躍できる社会にするための理論を整理、発信する(弟子入りの恩返し?)

2024/10/05 基調講演 北海道乳幼児療育研究会 第38回研究大会 2

今日はその中でも、2つ目のNPO、市民活動の実践者としての立場で話をします。現場としては釧路にあるNPO法人地域生活支援ネットワークサロンである(以下、ネットワークサロン)。活動の詳細は法人のサイトで比較的、詳しく説明していますので、興味のある方はそちらをご覧ください。

[TOP - NPO 法人 地域生活支援ネットワークサロン](https://n-salon.org/)
<https://n-salon.org/>



釧路市・釧路振興局業務委託事業
学習支援事業

おいでよ!
Zっと! Scrum

「Zっと! Scrum」では学習支援を行っています。
詳しくはバナーをクリック!

今日の話の中心は「FFP (フレーム フリー プロジェクト) という若者たちとの活動である。このネーミングは若者たちの活動への思いが込められている。知らないうちに私たちに縛っている「枠」から出て自由になりたいという思いである。その思いは若者たちが活動当初に表現した説明によく表現されているのでそのまま紹介する。



たぐさんの若者たちに弟子入りしていきました。
たぐさんの師匠が私にいろいろなことを教えてくれています。

Frame Free Project

生きづらさを経験した若者たちが「自分を知り、他者を知り、社会を知る」「社会とつながる」活動価値観を広げていく、感じ、考え、表現できる人になり、地域や社会をつくる

「仕事をしていない、病気がある、学校に行っていない。」

私たちの抱える生きづらさは、まるで悪いことをしているように言われてきました。

私たちの存在は、肩書きや立場や思惑の前で、とるに足りないもの、なきものとして扱われ、生き方を指導されるだけでした。

それは私たちにとって何の意味もなさなかったし、それどころか私たちにとって「私」を見失う結果になりました。

運よく私たちの生き方を認め、サポートしてくれる人に出会えて、安心して食べて眠れる場所、

社会的な活動の機会を得て、何とかやっつけていけるかもしれないと思えるようになり、徐々に自分らしく（自立）進んできた。

しかし、「私」を失ったことは想像以上のダメージとして、私たちの中で残り続け数多くの困難にぶつかることになりました。

何かをしても続かなかつたし、積みあがっていきませんでした。

それが非常に歯がゆくもどかしかったです。

日々の活動を通じて、「私」を表現していくなかで他者とつながり、ようやく「私」が積みあがり、社会につながっている手応えを感じ、生きている実感が湧いてきました。

私たちが抱える生きづらさに着目した時、それは、実は社会の不完全な部分を映し出していることが見えてきました。

生きづらさがわかる私たちだからこそ、これからの豊かな社会を実現していく役割があります。

私たちは、多様な価値観の交流ツールとしての「フィードバック研究会」を手がかりとして、個々の価値観の枠の広がりから社会の価値観の枠の広がりへと発展する取り組みを展開したと考えています。

そして、自分たち一人ひとりにあった新しい働き方を地域と協力してつくっていくことを目指します。

プロジェクトを通じて、個人と地域の可能性を見つけ、誰もが豊かに生きることができる北海道をつくっていきたくと思っています。

ともに活動する若者たちの中心メンバーは私がネットワークサロンで2004年から2007年ぐらいまでに出会った制度のはざまにいる若者たちと2008年以降札幌市のスクールソーシャルワーカー（以降、SSWとします）の相談で出向いた定時制高校の支援でつながる。いずれも、障がい福祉の対象にはなりにくく、かといってすぐに自立するに

は経験や力がまだ足りないような若者たちである。今は、自立援助ホームとしてサポートしている若者層であり、最近の言葉としてはヤングケアラーである若者たちも多くいた。本来なら家から出て自立を目指すこと大半な年齢であっても、家から出られない状況であった。子どもや若者たちを取り巻く環境は深刻なのに、それをサポートする手段があまりにもないのが現実であった。加えて支援機関や関係者も限界を感じ、追い詰められましたので、まずは地域で何とかできることはやろうと釧路で蓄積してきたサポートの仕組みを土台に居場所のない若者たちを受け入れていった。

スタンダード(当たり前)が違う

出会ったころの若者たちの家庭は複数の生活課題を抱えていた。自らの障がいやメンタルの問題、親の障がいやメンタルの問題、虐待やDVなどの暴力、犯罪の被害や加害、非行、不登校など、本来子どもにとって安心の場になるはずの家庭がサバイバルの場であり、毎日何とか生き抜いているような生活ぶりであった。

客観的な目で見るとそうした生活は絶望的な状況だったが、不思議なことに本人たちは絶望したり、怒りや悲しみにくれたりしているかというところではなかった。多くの子どもたちが厳しい生活をごく普通に話してくれましたし、むしろ笑って元気に話してくれることもあった。子どもたちにとって自分たちの生活がスタンダードであり、それがおかしいとか理不尽だとか感じることもできなくなっているのである。

のちに経済学者のアマルティア・センが「適応的選好形成」という言葉を使っていることを知る。人は長期間、抑圧的で希望を持たない環境に置かれると、その過酷な環境に適応してしまい、本来感じてもおかしくない感覚や感情を抱くことができなくなり、健康な自己選択や意思決定が阻害されてしまうという考え方である。相談で会う若者たちはまさにその状態だった。加えて多くの子どもたちは強い自責の念を抱え、恐ろしく自己肯

定感が低い状況にあった。支援を受けることへの抵抗感や後ろめたさ、常に周囲からの評価におびえ、顔をうかがい、自分を信じること、そして人を信じることに困難を抱えていた。

若者たちと長期間付き合っていくと育ちへ阻害の根深さがここにあることを思い知る。生きづらさはその時の困難な状況の問題なのではなく、育ちの中で本来なら空気や水のようにあるべきものが常に欠乏することにより、生活スキルや社会スキルを身に付けるためのチャンスが奪われることで、長期間にわたり健康的な心身の発達が悪化され、自由の獲得を困難にするのである。最初は「なんで、こんなこともできないのか」「なぜ、こんなことばかりするのか」と批判的になってしまいそのような言動にもその背景があることに気づく。深くかかれればかわるほどに当たり前の感覚が違うことを思い知らされ、知らずに軽率なかかわりをしてきたことを申し訳なく思いながらも、わかったつもりでいても実はまだまだ理解していないことにハッとするなど、支援の奥深さや本質について気づかせてくれる存在になっていった。

FFPの活動とその土台

FFPの活動の三本柱は「研究活動」「講師派遣」「日常活動」である。この三本柱が機能した背景には法人が自主的に必要に応じて展開してきた生活支援の土台がある。私たちが出会う若者たちは総じて経済的な基盤がない。なかには生活保護世帯から一人だけ生活保護を移管する形で受けることもあります。生活保護活用にハードルがある場合も多くある。そこで、金銭的な負担をせずに（あるいは、かなりの低い負担で）食事つきの住居を用意し、必要に応じて相談支援、就労支援、学習支援、様々な社会体験の提供をする独自のスタイルを作ってきた。そうした包括的な生活支援により、若者たちは少しずつ自分を取り戻し、社会活動であるFFPが創造された。きっかけは、「フィードバック研究会」という活動である。

「フィードバック研究会」は私たちが何となく当

たり前だと思っていることを深く考える討論会で、大学のゼミのようなイメージである。「家族って何?」「普通って何だろう?」「恋愛とは?」などなど、何となく普段使っている言葉の中身をそれぞれの経験や価値観に即して、深めていく。そうすると、実は同じ言葉を使っているのに、実はそれぞれ違ったことをイメージしたり考えたりしていて、同じではないことに気づく。フラットな場で意見交換することで、自分の価値観を知り、他の人たちの価値観も知る。そのことで、自己理解や他者理解も進みます。今まで自分が当たり前だと思っていたことが、自らが感じたり考えたりしたことではなく、誰かから強い影響を受けていることに気づく。最初は影響を受けている相手が親だったり先生だったり身近な大人であることに気づきますが、議論が進むと、親や先生という個人の問題ではなく、自分たちを含めて人々が見えない「当たり前」に縛られていることにたどり着く。自分が苦しかったのは自分のせいではなかった。自分の生きづらさの原因が自分ではないことに気づくことは自己肯定感の低い若者たちにとっては大きな転機になる。もちろん、簡単にそう思えるわけではなく、時間もかかりますし、仲間同士の日常的な支えも必要である。そして、そこからもう一段階進むためのポイントは、自分のせいでもないし、自分を苦しめてきたと思っていた親や周囲の無理解な大人たちのせいでもなかったことに気づいていくことだと感じている。もちろん親へ怒りや恐怖など負の感情を抱え続けてもそれは自然なことである。ただ、それとは別に自分に起こったことを社会的な問題と結びつけて理解するプロセスが社会の一員であることを自覚していくことにつながる。そうした自分をエコロジカルな視点や感覚でとらえられる経験が蓄積されることで失われた自由や可能性を取り戻していく。

「自分の課題」から「社会の課題」へ

「フィードバック研究会」は自分たちの課題に直接向き合うのではなく、間接的に研究材料として

自分から切り離して考えることができる機会として、社会活動の入り口として効果を発揮する。しかし、若者たちは直接自分たちが抱える問題にも向き合わなければならない。日々の生活での困難は簡単には改善しない。長年の課題から派生する数々の困難に日々付き合わなければならない。いくら、議論をして背景がわかって、実生活に学びの場がなければ困難は続く。

自らの困難により現実的に近づくために、研究活動は「講師派遣」に発展した。研修の機会に出向き、若者たちの実経験を教材にして支援者と一緒に学ぶものである。多い時は月に数回、研修の講師として呼んでもらい、いろいろな地域や支援者とともに学ぶ機会を設けてきた。参加する支援者の方たちからは「こんなに自分のことを語れるなんてすごい！」と驚かれますが、フィードバック研究会の経験から自分について語る力がついているので、当人たちはそう言われるのが不思議なくらい自然に自分たちのことを語るができる。このような活動の展開の中で、自然ともう一つの活動である「日常活動」ができあがる。シンプルに日常を共に過ごすというもので、それを活動と呼ぶのもちょっと不思議な感じもしますが、実はとても大切な活動であることにのちに気づいてきた。例えば一緒にご飯を食べる、思いっきり遊ぶ、知らないところに出かける、しゃべるなど、そんな当たり前の日常場面を通じて笑い合ったり、時には感情をぶつけ合ったりする。それまで失敗を過剰に恐れたり、周囲の目を気にしていたり、自信がなかった若者たちが素の自分を表現する機会となります。日常活動は楽しいことばかりではなく、嫌な思いや失敗もありますが、それをまた振り返り、話し合う機会があることを知ることで、安心して新たなチャレンジができることにつながる。

仕事づくりが仕事になった「コミュニティホーム大川」

FFP の活動は 2015 年から 3 年間×2 クールの計 6 年間、財団法人秋山記念生命科学財団の助成を受けたことが、活動の発展に大きな力となる。継

続した金銭的な支援をもらえることも助かるのですが、それ以上に、年に一度の活動報告会で自分たちの活動についてプレゼンテーションすることが成長を後押しする貴重な機会となった。助成金の第 2 クールでは、それまでの三本柱の活動に加えて「仕事づくり」を目指していたが、2017 年に法人の運営体制に大きな変化があり、2018 年の春から自立援助ホーム、グループホーム、そして自分たちの下宿が一体化した拠点の運営を若者たちの力を借りないと存続できない状況になり、「日常活動」が本当に「日常」となり、仕事に展開していく。ひきこもりで仕事に出られなかった若者が一緒に暮らす車いすの青年の介護を仕事にしながら、人との関わり合いについて考えたり、ギャンブル依存に今も向き合う若者が、育ちにつまずき心も行動も荒れている 10 代のメンター役になったり、母親との共依存の中を生き抜いてきた若者がいろいろな大人と関わることで多様な人間関係のあり方を実感したりと、日々様々な相互の学びが生まれた。そうした日々織りなされるリアルな人とのつながりが多くの可能性のもとになっている。

若者たちが社会資源になった

その後 FFP の活動は休眠預金活用事業の助成金を受けて、「若者自立プロセス資源化モデル事業」としてさらにバージョンアップされてきた。特に若者たちの仕事づくりに関して整理し、まとめる機会を得たが、若者がいることでできた隙間的な仕事がたくさんあることに改めて気づくことになる。コミュニティホーム大川の仕事以外にも、強度行動障がいの方の支援、自立援助ホームでは難しい、対象外の若者たちの地域生活支援、宿直や土日、夜間帯の見守り業務、緊急預かりへの柔軟な対応、相談支援事業(電話、SNS 特に深夜帯)、SNS やインターネットを活用した事業、単発の請負仕事、研修講師、相談事業のモニターなどを含めて 2019 から 2021 年度の 3 年間で 1 億円以上の仕事が生み出されていることがわかった。

特に厚生労働省の自殺対策の補助事業として2019年に開設した「ネットの居場所ポータルサイト『死にトリ』」は若者たちの活動を一段と発展させ、その潜在能力を発揮する機会となる。



現在、コンスタントに一日平均 800~1000 ほどのユーザーが訪れ、そのうちの 8 割以上が新規利用者で、ほとんどの人たちはネットで「死にたい」「消えたい」「つらい」などという気持ちを検索してつながってくる。毎日毎日これだけの人たちが生きること絶望している現実を突きつけられている。「死にトリ」の由来は「死にたい」の取扱説明書(トリセツ)です。発想されたのは3年ほど前、自殺対策の事業として当時の Twitter (今の X) のパトロール事業に取り組んだ時である。私はそれまでも、たくさんの生きづらさを抱える若者たちと関わってきたが、「死にたい」「消えたい」という訴えについてあまり触れる機会がなかった。どちらかという、経済的な悩みや家族関係、依存の問題など、具体的な課題と向き合うことが多かったからである。しかし、Twitter パトロールをやりながら、改めて若者たちに話を聞いてみると、ほとんどが「死にたい、消えたいと思ったことがある」と答えました。また、Twitter には「病み垢」と呼ばれるアカウントがあり、ある種のコミュニティが形成されていることがわかった。そのコミュニティの共通のキーワードが「死にたい」という言葉なのである。だから、私たちはそのキーワード「死にたい」について、解明すべく活動を深めていく。そこで行きついたのが『死にたい』の取扱説明書つまり「死にトリ」というわけである。なぜ、「死にたい」なのか？今の社会の課題を理解するために極めて端的なテーマであった。

「死にたい」の研究結果

私たちは「死にたい」を研究し共通点を見つけ

た。それは「死にたい」に共通しているのが「理想と現実のギャップ」ということである。そしてその理想の多くは一人ひとりの望むものというより「世の中のマジョリティが理想とする像」であり、それに到達できないのは「努力不足や能力不足」であるという評価であった。その中で、「死にたい」を抱える人たちは至らない自分を責め、強く自己否定をしている。それは病み垢だけではなく、一緒に活動している若者たちも同じでした。「自分が悪い」と自責したり、「どうせ、自分なんて」と自棄になっていたりすることはデフォルトであった。強い自己否定や後ろめたさに苛まれ、その結果、苦しい現実から逃れるために事実を受け入れられず、サバイバルスキルで何とか生き延びる人たちもたくさんいます。サバイバルスキルは時に社会不適応の評価を受ける。批判されたり、自業自得だと責められたり、自己責任論で片づけられてしまうこともある。まさに負のスパイラルである。社会の理解や支援の不足が生み出す苦しさを個人が引き受け、苦しさを何とかする自助努力がさらに個人にダメージを負わせるのである。私たちは「死にトリ」を通じてその負のスパイラルに歯止めをかけるべく、社会の課題を明らかにし、正しい理解と支援が広がるために何ができるか模索している。

そのために私たちが大切にしているコンテンツが「経験談」である。死にたいほどつらい気持ちをありのままに綴った原稿を募集し、掲載しているものである。年間 1000 通以上の投稿があり、承諾を得た原稿がサイトに紹介されている。年代や内容や分量は実に様々であるが、いずれも過酷な権利侵害や排除された経験が、自己否定や自責の念や反省の言葉とともに書かれている。何らかの障がいを抱えている人もとても多く、同時に子ども時代にサポートを必要としている人たちも多いが、理解者に出会うことができなかつたり、逆に助けを求めても否定されたりする経験を持つ人もたくさんいる。一つひとつが重くリアリティが詰まっ

ているものばかりである。寄せられた経験談にはすべてスタッフが感想を書いて、返信することになっている。私はサイト開設以来ずっと、経験談の感想書きを続けている。自分も生きている今の社会の内実を多面的（特に排除されている立場の視点から）に実感するために必要不可欠だと感じている。

コミュニティホーム大川を中心とした包括的な生活支援と死にトリという就労の機会によって、さらに若者たちを受け入れる体制が広がった。北海道内だけではなく全国から生きづらさを抱える多彩な若者たちがつながっている。気づいてみると、それは支援をしているというより、潜在化しているタレントを発掘することであり、その隠れた才能を開花させられる機会を創出することになった。

見えない当たり前の師匠たち

そうした若者たちとの出会いと関わりで展開した活動から学んだことが「見えない当たり前」である。今回のテーマである「**個々の歴史、そだちの物語にふれる**」ことでしか学びえないこともある。自分が当たり前であると思っていたことが、ある人にとっては全然当たり前ではなく、同じ言葉を使って一見分かり合っているように見えて、実は違う意味でとらえていたこともある。自分を含めて一人ひとりの基準は実は違って、その違いはこれまでの経験や権利の保障の状況に大きく影響されていることに気づいた。言い換えると、人は「知らないうちに履いている見えないゲタ」があったり、「知らないうちにつけられている見えない足かせ」があったりするということである。別の言い方をすると「免除された苦勞」と「押し付けられた苦勞」と言えるかもしれない。たくさんの若者たちとのかかわりの中で自分の中の「当たり前」が揺らぎ、壊されて、新しくなった感覚がある。そのことによって、ようやく、見えないものが少しずつ見えていったような感覚ともいえる。

例えば、ある若者は家で母親から「今日、何食べ

たい？」と聞かれるのは食べたい物を答えるための質問ではなく、母親の作れるものを空気を読み、意をくんで正解を答えるための試験問題のようなものだといった。我が家に来た時に私の母に「何食べたい？」と聞かれて、食べたい物が出てくると比較して、新鮮だと話す姿を見て、「何食べたい？」の意味がこんなに違うとは愕然としたと同時にそんなことを想像もしなかったことにも気づいた。

また、ある若者は中学時代から危険なこともわかっていた出会い系で男性とつながり続けていた。大人の常識で判断すると非行少女であり、実際に深夜徘徊で警察に保護された際にはコンビニのトイレに立てこもり大騒ぎになった経験があった。児童相談所の一時保護につながっても、本人はやっと保護してもらえると思いきや支援者から怒られ、諭されることとなり、帰りたくない家に戻る方がましだと家に戻るようになった。高校時代に出会い、途中から釧路に移住してきたが、私たちのサポートがあっても不安定から抜けられずに、近くの支援者より、遠くの男性を選び続けた。本人から生い立ちや性被害やサバイバルの歴史を聞いたのは出会ってから何年もたってからであった。活動の中でトラウマの勉強会（ハーマンの「心的外傷と回復」の読み合わせをする）を通じて、その行動の理由をともに理解したのもその後であった。同時に発達障がいと軽度知的障がいがあることも大人になってから初めてわかった。

別の若者は現在、理解のある職場で自分の役割もあり、収入も生活も安定しているのに、ギャンブルを止めることができない。いわゆるギャンブル依存の状況にある。生活管理もとても苦手でごみ屋敷のような部屋で、生活習慣病を抱えている。世間の常識から考えると、甘えであったり、やる気の問題だったり、努力不足だったり自己責任としてとらえられがちである。ただ、背景には面前DVや自分への暴力や抑圧の経験で根付いたセルフケアの癖があること、継続した研究活動の参

加や講師派遣の経験などを通じてお互いにわかってきた。追い出される心配がない大川のコミュニティで暮らし、理解とサポートのある仕事をしながら、ゆっくりであるが、セルフケアの方向性が少しずつ変化しているようである。（研究大会の講演では、ギャンブルを止めたいと話したのですが、その後やっぱりやめていなかったことがわかった）。

釧路の活動には、家庭環境が過酷でいわゆる逆境体験をしてきた若者たちも多くつながるのだが、発達の凸凹があっても幼少期や学校であまり気付かれずに、高校で不適応が顕著になりつながる若者層もいる。ある若者（今回の研究大会の交流会型トークセッションにも参加してくれた、講演の最中にステージにのぼってきて、私に挨拶をしてみた若者です）は集団生活でたびたび突飛な行動をして周囲を驚かせ、困らせていた。中学時代から始まり、高校でも問題視された行動が学校でのアームカットである。多くの人たちの当たり前で判断すると典型的な問題行動で、実際に高校ではそれを機に「行動の改善が見込まれるまでは登校しないでください」と注意を受けた。学校としては本人の様子から発達障がいではないかと医療機関の受診を進めましたが、本人の納得につながらず、親も本人も行き詰っていた時に私とつながり、釧路に来ることになった。活動を通じて自己理解の必要性に気づいて医療機関につながり1年後ぐらいにASDの診断を受けることになり、その特性に納得し、さらに自己理解を深める機会を得た。釧路である程度理解する人たちと過ごしていても、いきなり弁当や飲み物を頭からかぶってしまったり、突然の破壊行為や暴力的なふるまいをしてしまったりして集団の場面で苦勞をしていた。今は札幌で一般就労していますが、職場でも時々問題行動を起こし、服薬治療を試みることとなった最近になって、ASDの特性である「易刺激性」だということを知ったようで、報告してくれた。

例で出した若者たちはいずれも長い年月をかけ

て、いろいろな場面で関わり、時間を過ごし、ともに学びあうことでお互いの当たり前の違いに気づいていった。私たちにとっては例に出した若者だけではなく、出会い関わった人たち一人ひとりが師匠のような存在として、私に見えない当たり前について教えてくれた。

私たちはその見えない当たり前を可視化しようと、新たな助成金のプロジェクトでリスト化とチェックリストの作成を取り組み始めたので、紹介する。

見えない当たり前に気づくチェックリスト

見えない当たり前は「マジョリティの特権」とも言い換えられます。ここでいう特権とは、「マジョリティ性を多く持つ社会集団に属することで知らないうちに得てしまっている優位性」のことを指す。これは個人の考え方や価値観の問題というより、制度的差別、文化的差別など社会構造の中で生じて、個人のふるまいとして表面化するものである。差別する人が悪いとか頑張れない人が悪いとか、「本人の努力不足や頑張り」の問題ではない。ただ、特権は、持っている側には意識しづらく、それが基準になると特権を持たない人の努力の問題にすり替えられがちになる。つまり、自分とは異なる人の歴史や物語を受け止め、理解を妨げる壁にもなる。

支援に携わる立場として見えない当たり前を意識し、気づくためには自分の特権を自覚した上で、いかにマイノリティ性に耳を傾けられるか、実態を理解し、想像できるかが大切である。つまり、マジョリティ側がマイノリティに弟子入りし、同盟関係をつくることがポイントである。私も多くの若者たちに弟子入りして、たくさんのことを教わったが、自分自身もマイノリティ性を持つので、例えば重度の障がいの子どもの介護する家族として、支援者の師匠になることもあります。誰でも、ある時は弟子、あるときは師匠になることができる。これまでの支援現場では、サポートする側が先生や指導者という認識があったかもしれないが、

見えない当たり前理論ではマイノリティが師匠と
なることがポイントである。すなわち、既存の教
育や支援の常識を覆すことになり、その在り方が
根本から問い直される機会となる。

以下にチェック項目のリストを紹介する。講演
の際には点数も付けられるような表で配布しまし
たが、まだ試行段階でもあり、報告では点数は省
きます。今後、チェック結果をフィードバックす
るシステムを開発予定である。興味のある方は、
このプロジェクトの note を参照ください。

(リストは本原稿の最後に掲載)

チェックリストで何が分かるのか

チェックリストをやることで、いろいろな気付
きがある。このチェックリストはやってみて、何
点になったからこういうことが言えるという単純
な診断的な使い方よりも、出てきた結果で自己理
解を促したり、人と関わるときの留意点として、
自分とは「当たり前が違う人がいる」という気づ
きをもたらしてくれたりすることがもっとも重要
だと思っている。

これまで大学生を中心に試行してみて、学生た
ちの感想から気づきが多く寄せられている。自分
では気づかなかった「当たり前」に気づくことが
多いのだが、中には今まで気づかなかった生きづ
らさがあったことに気づいたという声もあった。
どちらかという、マジョリティ要素に気づくよ
うに作ったものであるが、図らずもずっと違和感
やモヤモヤとして抱えていたマイノリティ要素が
可視化されて、「自分が悪いわけではなかった」と
いう気づきにもつながったようである。

そして、興味深いのは「気づかないことが分か
った」という比較的肯定的な意見だけではなく、
どうも納得できない、釈然としない思いを抱く人
も少なからずいることである。このプロジェクト
の企画で参考にした書籍『真のダイバーシティを
めざしてー特権に無自覚なマジョリティのための
社会的公正教育』(ダイアン・J・グッドマン著 上
智大学出版)でも、同じようなことが書いていま

す。自分に与えられている特権に気づかないマ
ジョリティ要素を可視化すると、遠回しに批判され
ているように感じたり、「自分だって大変なんだ」
とか「努力をしたから得たものだ」という気持ち
になってしまったりすることがある。たくさんの
社会的排除の現実を見てきた私にとっては、そう
いった反応を見ると「支援する側なのにわかって
いない」と強く反論したい気持ちになってしまう
のだが、そこで反論しても理解が深まることはと
ても少ないように思われる。少なくとも、今まで
気づかなかったことに触れ、気持ちや価値観が揺
さぶられるということには意味があるように思わ
れる。グラグラと揺れ、考えるきっかけになるこ
とは確かなので、そのきっかけを次にどうつなげ
ることができるかが今後の大きな課題になると感
じている。

ギャップにご注意を

そのヒントとして、同じ項目で優位性のギャ
ップが高いほど、関わる際に注意が必要になるとい
う点に注目している。例えば、結婚して子どもを
持つことが当たり前の人(ジェンダーや家族規範
マジョリティ)にとって、「子どもは何人ほしいで
すか?」という質問はとても自然でほほえましい
質問になるが、同性パートナーや子どもを産めな
い、産まない方たちにとってはとてもつらい質問
になる。また、勉強ができる人が勉強のできない
人に「頑張ればできるようになるよ」とか「別に
できなくてもいいんじゃない」「私も最初はできな
かったよ」などは、よかれと思ってかける励まし
や理解の言葉のように見えるが、優位性にギャ
ップがある相手から言われるとしんどい気持ちにな
る。

私は長女の療育のために母子通園施設に通って
いたが、施設の先生たちに「頑張ってますね」など
励ますような言葉をかけられることに違和感があ
ったことを思い出す。一方、同じ時期に参加して
いた親の会で同じように障がいを持つ子を育てる
仲間たちに「頑張っているよね」と言われるとす

んなりと受け入れられて、嬉しい気持ちになった。今考えると見えない当たり前がそこにはあったことがよくわかる。また、子育て中においては、親という同じ立場であるはずが、通園施設に父親が行くと「〇〇ちゃんのお父さんはすごいね」とほめられる、当の本人もまんざらでもない顔をする様子を見て、とても違和感があったことを思い出す。それがまさにジェンダーについての見えない当たり前が明確にあったことが今になるとよくわかる。このギャップでの違和感が厄介なのは、いつも優位性がある方が気づかず、不利な方が気づいてしまう点だと思う。そして、その違和感やダメージは気づいても、相手に伝えることはほとんどない。わからないだろうから仕方がないと思う気持ちもあるが、言っても反論されたり、逆に責められてしまったりと、弱い側が痛い目に遭うことが容易に予想できる。そうなる、ますます見えない存在になる。だからこそ、チェックリストのようなもので可視化し、自分の優位性に気づいて、準備をすることは社会を少しでも公正なものにするうえで、大切なことなのだろうと思う。

思考と対話の大切さ

差別や格差は個人の努力や価値観の問題ではなく、社会構造の中で起きているので、誰もが差別をする可能性、される可能性があります。それに目をつぶり避けることや、個人の考え方の問題としてしまうことで差別は生まれ、温存されていく。そうした社会構造の中である種の機能のハンディや発達凸凹や未学習や誤学習が生活の支障として問題となったときに「障がい」が生じる。そして、障がいや生きづらさ、育てづらさの結果、支援につながる。私たち支援者は目の前にいる個人の問題として支援をとらえるのではなく、社会構造としてとらえ、個人とかかわりながらも構造を変えていく役割もある。そのためにはまず、自分たちの見えない当たり前(特権性)に気づくこと、さまざまな社会問題について目の前の人たちから正しく学ぶことが何よりも重要である。それはすな

わち「家族個々の歴史」を聞き取り、そだちの物語にふれることだと私は思う。

そして、「対話」が大切だと感じている。マジョリティとマイノリティの問題はマジョリティがマイノリティのことを理解するという一方的な問題ではなく、相互に理解をしていくことだと思われる。そのためには、たくさんの対話の機会が必要だと考えているし、支援する側も「自己表現」の機会が大切だと思われる。

見えない当たり前をしてしまった時に出てくるもやもやした気持ちの背景にはマイノリティ、マジョリティ問わず、今の社会においては誰もが自分であることが抑圧されていたり、自己表現の機会が保証されていなかったりと「尊重」から遠ざかっている現実があるのではないかと感じている。尊重されていない人が誰かを尊重するのはとても難しいことだと思われる。

私は障がい児の親として親の会活動につながり、ピアの心地よさを原点として体験する機会を得ることができた。それはまさに尊重のリアル体験だし、原体験として私の中に根付いている。だからこそ、若者たちと尊重をベースとしたコミュニティを作ることができたと感じている。それと同じように何らかのマイノリティ要素はピアのつながりを生み出しやすく、そこではありのままの自己表現をする機会が保障される。しかし、マジョリティ要素が強い人はあるべき姿に暗黙に集団や組織への適応が求められ、一人の個人としての気持ちや考えを表現する機会を得ることが難しいのかもしれない。支援者として、社会人として、〇〇長として…などなど社会的役割や立場や責任で、自分の気持ちを抑えて我慢をする機会が多ければ、知らないうちに他者に抑制や我慢を強いてしまうは無理のないことなのかもしれない。それだけ、支援する側の置かれた現状の厳しさも感じている。そう考えると、小さいころから自分の感じることや気持ちや考えを伝えることができ、他の人の感じることや気持ちや考えを受け止める、相互に意

見や価値観を交流する機会を保障する場が改めて求められていると思われる。そういう意味では私たち対人援助職は多様な価値観を交流するチャンスはたくさんあるといえる。難しい側面もあるかもしれないが、そうした絶好の機会を使って、多

様性や個性、違いについて思考し続け、対話をしていくことが可能である。それが遠回りのようですが、結果として私たちが支援において求められているものに近づくのではないかと思っている

見えない「当たり前」チェックリスト

| | | チェック | 点数 |
|----------------------------|-------------------------------------|--------|-----|
| | | カテゴリ-A | 合計点 |
| A-① (生物学的な性の当たり前) | | 合計 | |
| | 男である | | +3 |
| | 女である | | -2 |
| | どちらでもない | | -3 |
| A-② (セクシュアリティの当たり前) | | 合計 | |
| | 同性愛である | | -2 |
| | 同性愛でも異性愛でもない性愛(バイ、パンセク、アセクなど) | | -1 |
| | 生物学的な性と性自認がまったく一致していない | | -2 |
| | 生物学的な性と性自認に多少違和がある | | -1 |
| | 服装やふるまいなど生物学的な性別で求められる表現ができない、したくない | | -1 |
| | その他、セクシュアリティについて周囲から理解されない要素がある | | -1 |
| | 上記の内容がいずれも当てはまらない | | +3 |
| A-③ (家族を持つことの当たり前) | | 合計 | |
| | 結婚して、子どもがいる | | +3 |
| | 子どもはいないが、結婚している | | +1 |
| | 結婚していないが、子どもがいる | | +1 |
| | 子どもが持てない・持たない | | -1 |
| | 離婚歴がある | | -1 |
| | 事実婚またはパートナーシップ制度活用 | | -1 |
| | 40歳以上で一度も結婚したことがない | | -2 |
| | パートナーはいるが周囲に簡単に言えない関係 | | -2 |
| | 将来は結婚できそうもないまたはしたくない | | -2 |

座長のまとめ

佐々木浩治

(障がい児・者地域サポート ふれあい)

日置真世から『「家族個々の歴史」から、そだちの物語にふれる』という演題で基調講演をいただいた。ご自身の家族の歴史や現在釧路で支援している青年たちとのかかわりから、多くの示唆に富んだお話をいただいた。講演の内容については、日置の原稿にお任せすることとし、座長記では講演後のフリートークの内容を踏まえ、その中で感じた座長の願いや考えを記載する。

幼少期の虐待経験等により生活経験が乏しく、いわゆる当たり前前の生活経験を積み重ねていない場合に、それなりの年齢になっても、いわゆる当たり前前の行動ができないことがある。いわゆる当たり前前のことが出来ない場合に、何を学び、何を学べていないのかを丁寧に見立てることが重要となると考えている。子どもたちの発達状況や養育状況を常に分析し、支援への見立てと検証を繰り返すことを大切にしたいと願っている。

また、ヤングケアラーの子どもたちは、多くの場合、自己の意に沿わない環境であっても適応しているかのような行動をとり続けていることで、周囲からは特に問題がないように思われていることが多い。しかし、その行動は、周囲の期待や思いに合わせて反射的に行動しているだけで、自分の中の思いとはかけ離れたものとなっていると推察される。そのため、「自分らしく行動してもいいよ」と言われても、何が自分らしいのか、どう行動することが自分らしいのかわからないことが多い。ヤングケアラーと思われる子どもたちに対しては、気持ちを解放して生活できる居場所作りや自分の思いを伝えら

れる大人がいる場面での生活経験を大切にしたいと願っている。

最後に保護者支援に関して、日置は「親がどういうタイプか、どういう子育てをしているかなど常に見られているとすごく感じていた。また、何かやると褒められるけれど、全然嬉しくなく、誉められている時にダメな自分が思い浮かんで、自分が嫌になることが多かった。何か評価的ということに追い詰められると思っていた」と話していた。保護者は、自分がやっていることはどうだろう、これでいいのか、また、どう思われているんだろうと考えていることが多いと考えている。保護者の方を精神的に追い詰めるものとならず、保護者の方に側においてもらえるようなアセスメントや対応の在り方を検討することが必要と考えている。

『「家族個々の歴史」から、そだちの物語にふれる』というテーマから考えると、我々が会おう子どもたちや保護者の方々には、家族個々の歴史やそれにともなう育ちの物語がある。その物語は、一人ひとり全く違うものであり、経験していることも全く同じものはないと思っている。我々は、その方々の人生の連続線上の一部に出会わせていただいている。人生における一時期の支援としても、「家族個々の歴史」から、そだちの物語に思いを馳せながら、支援を必要としている子どもたちが、健やかに育っていくこと、保護者が育ててきて楽しかったと思えるような支援ができることを願っている。

当事者の話から対話により学びを深める

日置真世

フリー

はじめに

2人の若者をゲストに最初は二人の自己紹介を司会との対話で進めたのち、会場を二つのグループに分けて、ゲストを囲み質疑によって話を深めた。ゲストに声をかけ、企画をした立場としては、それぞれいつもの通り話ができるのだろうか心配するところもあったが、参加者の皆さんの受容的な雰囲気や熱心さもあったのか、二人ともリラックスして自己表現をしていたように見えた。

以下に本人からもらった自己紹介(+補足)を加えて、ゲストの二人を紹介する。

話題提供者1

以下の文章は話題提供者から直接原稿をいただいております。そのため他の原稿とは表現方法が異なることをご了承ください。

1. プロフィール

名前:佐々木 年齢:壮年手前(20代半ばです)

性別:男性

2. これまでの簡単な経歴と現在の職業

21歳で通信制高校を卒業、その後なんやかんやで会社員になりました。

3. 診断名と診断された時期

・ASD(17歳の時でしたっけ)

・診断されてはいませんが、ADHDの例として挙げられる特徴の数々に心当たりがあります。

4. 自分が生きづらいつ感じ始めたとき、そのエピソード

幼い頃から周囲との違いを自覚しておりましたが、これを不自由なものとして深刻に捉えられたのはじめての事象は中学生の時。

音楽の時間、先生に怒っていた自分に投擲されたカッターナイフは、抑えきれなかった害意によって刃が2mmほど出ており、自宅謹慎を余儀なくされました。

余談。このとき、前の席に居た生徒との関わりは今なお続いており、会う度にこの時の出来事について言及してくるほど印象に残っているらしいです。

ちなみに不自由はこれだけに留まらず、高校に上がった直後もこれと異なる発達特性、突発的な暴力性の出力によって事件は引き起こされ、それは直ちの停学に陥る結果を齎し人生最大の失敗となりました。

(母はとてもおおらかな方で特性も個性としてとらえていたようで、家での問題行動もなかったことから、療育の必要性を感じることはありませんでした)

5. 支援を受け始めたきっかけとこれまでどんな支援をどれくらい受けたか

・停学中に不貞腐れていたときにあった日置さんの介入など

日置補足:本人が15歳の時に私がスクールソーシャルワーカーとして札幌の定時制高校に訪問したことから相談支援をスタートする。最初は母と先生との面談で、のちに家庭訪問して本人と初対面する。その時、本人は「しょうもない人を連れてきた」と思っていたそうだが、私がいさつしたときも、家のソファに横たわったまま、一瞥しただけであった。

面談の中で、農業に興味があるとの糸口から釧路のネットワークサロンの活動を紹介し、サポートを開始する。釧路では、若者たちの活動への参加、居住支援(最初はシェアハウスのちに自立援助ホーム)、就労支援(社会性の成長に応じていろいろなスタイルで)、支援機関との連携や仲介役、医療受診へのつなぎなどを行う。自立援助ホームで4年間暮らし、仕事は法人でA型就労の利用者さんも従事している特養の清掃でパート就労したりとフォーマル支援も活用していますが、それ以上に本人の力と個性でいろいろなインフォーマルなつながりを広げ、成長していったように思われる。

特に18歳ぐらいから3年ほどサービス管理責任者/児童発達支援管理責任者のための研修において、事例として参加してもらい、自分自身を福祉専門職が学ぶ機会の事例として提供して、道内各地へ一緒に出向いているいろいろな人たちに自分のことを伝え、考えてもらい、意見を伝えてもらう。本人の記載した文章を見てもわかるように、文章表現がとても個性豊かで、興味深く、言葉として話す表現はうまくいかないことが多く、集団生活でも困難が多くあったが、文章表現の力は研修でも活用させてもらった。私自身、何年も関わりがあり、何度も繰り返し研修で協力してもらおうが、その都度、新しい学びがあった。今回も久しぶりに来てもらったが、変わらずの本人の姿と成長した姿と両方を実感する貴重な機会となった。

話題提供者2

以下の文章は話題提供者から直接原稿をいただいております。そのため他の原稿とは表現方法が異なることをご了承ください。

1. プロフィール名

名前:かいじゅう 年齢:20代後半 性別:女

2. これまでの簡単な経歴と現在の職業

大学を出て、学校で働いてる。

3. 診断名と診断された時期

- ・起立性調節障害(昔。中学生の時。)
- ・聴覚情報処理障害(去年の冬)
- ・複雑性PTSD(今年度の夏休み)
- ・視覚の感覚過敏(医学的な診断ではないけれどアレンシンドロームの症状でもあると言われている)

アレンシンドロームの症状でもあると言われている)

4. 自分が生きづらいつ感じ始めたとき、そのエピソード

今でも生きづらいつ分かんないし、何が虐待だったのかよく分かってないけど、普通ではないってのは物心ついたくらいから知ってた。

経済的にもお母さんのメンタルもギリギリだった。いつからか、冷蔵庫に食べれるものはほぼ入ってなくて、洗濯はいつも溜まってて、掃除もしてなかった。洗剤とかシャンプーとかはほとんど空だった。お母さんの機嫌が悪いと、パジャマでも裸足でも家から出されて、玄関前で泣いてたら怒られて、どこか行ってしまおうとして玄関前から離れたら怒られて、そのうちベランダに出されるようになった。小さな時から、周りの子がやってるようなゲームはやったことないし、テレビも好きなのは見れないから友達の話が分からなくて、でも仲間外れになるのは嫌でなんか頑張ってた。

高校生になったら、中学校の部活に行ったら後輩に教えるにいたりしてお菓子もらったりしてた。地元の繁華街を3つめの居場所にしてて、知らない人に声かけられて一緒に食べ物食べたりしてた。(今でいう健全ってやつだったんだと思う。)

学ぶ上で大変だったのは？

授業はついていけなかった。学校行けてなかったり授業も出れてなかった時があるのもだけど、先生が何言ってるか分かんないし、教科書とか読むのつらくて頭痛くなるし、午前中は眠いし…。でも先生たちが見捨てないで補習とかしてくれて、奇跡的に高校も(あと大学も)卒業できた。

5. 支援を受け始めたきっかけとこれまでどんな支援をどれくらい受けたか

- ・高校の先生(勉強教えてくれた)
- ・前の学校の校長先生(話聞いてくれたりいろんなこと教えてくれた。)
- ・管内の養護 何人か(心配してくれてる)

- ・よりそい
 - ・ネットワークサロン
 - ・BOND
 - ・おでかけクリニック
 - ・(市内の病院も、?)
- きっかけは、よりそいに電話かけたこと？

日置補足:ちょうど2年前ぐらいによりそいホットライン(国の補助事業として24時間365日実施している何でも相談のフリーダイヤル)のコーディネーターから紹介されて出会った。釧路の近くに住んでいる若者でいろいろ生きづらい、最初は精神科の病院の情報を知りたいという主訴だったと思う。まずは一度会ってから…ということ、先輩の若者と一緒に会って話をし、ご飯を食べたら、その後、時々また会って話をし…ということが繰り返され、1年ほどたった時に物づくりのイベントに数回参加したことで、ライフストーリーの聞き取りをすることになり、生活面での相談に発展し、なぜかネットワークサロンの拠点に住み込んでもらうことになった(新しいプロジェクトで予定していた住み込み管理人がいなくなったので、そのピンチヒッター的などころもあり)。拠点への住み込みにより、ネットワークサロンが生活圏内の存在となったことから、夜や土日に複数拠点で活動の手伝いをしてきている。時々、病んだ時(仕事辞めたくなくなったり、死にたくなくなったり…など)にメッセージが来るので、可能な範囲で応答する関係である。少し前によりそいホットラインの従事者の研修で利用者としての話をしてもらい、いい機会になったので、本会にも声を掛けました。

フィードバック

ゲストの二人からそれぞれ、以下の項目について参加についてフィードバックをもらったことを紹介します。

1. 参加協力の動機
2. 当日話した内容(事実ベースでどんな質問があってどんな話をしたか)
3. 参加した感想(主観ベース)
4. 支援する人に改めて伝えたいこと

話題提供者1【佐々木さん】

1. お誘いがあり、断る理由もなかったため。
2. リスペリドンのお話をした辺りしか覚えてない。「相手のせいで病院に行って医療費を払わなければならない事を腹立たしく思っているか?」みたいな質問が超凶星で印象的だったので特別賞あげたい。
3. 何度も研修に参加してきた身だが、「労働者

として社会に出た人物」の視点を持って話し合いの場に参加したのはその時が初めて。ようやく人生における前進を実感出来た。

4. 支援を受けてきた当事者だが、当事者相互なら理解も容易いものかと考えていた時期はあったけど、人の事は誰にもわからんし結局のところ要領のいい健常者の方に分がありそう。自分には代われない仕事をしている支援者方に敬意を表している。

話題提供者2【かいじゅうさん】

1. 話をされて何となく。初めてのことだったから、やってみようって思った。

2. (あんまり覚えてないですが…)

・APD(聴覚情報処理障害)とか見え方聞こえ方のこと:どんなふうに見えてる・聞こえてる…いつどんな風に分かったか、どうされたら嬉しいかなど…
→環境によっては、声は分かるけど言葉として何言ってるかが全然分かんないことがある。白い紙に黒い字で苦手なフォントだと、読めないか、読めても読みにくくて頭が痛くなる。

→一昨年、聞こえ方が多くの人とどうやら違うっぽいことを教えてもらって、そこから病院紹介されたりしていろいろ繋がって行って判明した。

→同じ診断名でも人によって違うから…一緒にどうしたら良いか考えてくれたら嬉しい。

・家のこと:誰か言える人はいたのか…

→誰かに言うって選択肢が無かったから微妙だけど、言える人はいなかったと思う。

言える人がいたとしても、話せなかったと思う。

参加者からの意見や感想

・子どものためについていいながら、結局は自分のためというか、子どものための自分の学びになるように、子どもを見つめることを通して自分のことも見つめることにつながっているだなんて最近思っているとの話が出ていた…(仕事の話かな…)

・人に自分の話をするって普段無いことだから、何を言えばいいのか戸惑ったけど、話を聞きに来てくれた人がたくさんいて、みなさん優しく、普段なら黙り込みそうな場面だったのに話せたのがびっくりだったし、よかったです。

こんな私にも何かできることはあるのかなって考えるいいきっかけにもなりました。

・これをすれば解決!上手くいく!みたいな近道はないし、人によって何が合うかって本当に分からないし、正解なんてないんだと思うけど、だからこそ(?)一緒に考えたり悩んだりしてくれたら嬉しいなと思います。

まとめ

初の試みのトークセッションでしたが、当事者の部屋は二人のゲストの存在感で成り立ったように思われる。当事者の若者たちはいつも、私たち専門職に学びをもたらしてくれる存在ですが、ともに活動する私としては、研修の場で自分の話をする若者たちの姿は頼もしく、その機会は若者たち自身の成長を促し、社会とつながる貴重な機会になっていることを実感している。

保護者の話から対話により学びを深める

細谷 優子 あしよろ子どもセンター

「青年期に困難に直面する子ども」～保護者の視点
から～話題提供 松崎 享子さん

1. 家族構成

- ・ 私 元小学校教諭 保育ママを経て
10年前から特別支援学級支援員
- ・ 夫 中学校教員 → 小学校教員
- ・ 長男(23歳) 大学進学で下宿へ
→ 1年後 再び同居
- ・ 長女(21歳) } 進学し別居
- ・ 次女(19歳) }

十勝管内幕別町から来ました、松崎享子です。私は元々小学校教員で、結婚して子どもが生まれ退職しました。10年前から小学校の特別支援教育支援員の仕事をしています。夫は元々中学校の英語の教員で、異動で足寄小学校に転勤になった。

長男は今23歳、長女は好奇心旺盛な子で、人が大好きでどこにでも出かけたタイプ。この妹のおかげで長男も一緒に出かけ、たくさん経験させてくれた。次女は自分のやりたいこと淡々とやるタイプで、長男と関わらないけど仲が悪いわけではなく、3人ともが良く穏やかな関係である。

2. 息子の略歴

音更町で誕生(2001. 5)

よく食べる元気な子

1歳前から近所の子育て支援センターへ
ほぼ毎日通っていた

他の子との物の取り合いなどがなく、「育て
やすくいいね～」と言われていた

- ・ 3歳児健診(2004. 6)

「話すこと」に比べ「読むこと」ができず、
バランスが悪いと指摘される

この時は意味がわからず・・・

「できすぎて何が悪い！」と腹立たしかった

- ・ 足寄町へ引越し/保育園入園年中～(2006. 4)
年長に上がる前に、担任の先生から「お友達と遊ばず1人である様子が気になると伝えられる

↓

足寄町役場福祉課 佐々木浩治さんに相談

すぐに保育園に様子を見にいってくれる

その後 WISC-IIIを受ける

高機能タイプ(知的には高いがコミュニケーションや
言語表出が苦手)生活のしづらさがある。「たくさん
の成功体験を！」とアドバイスをもらう

(医療機関でのはっきりとした診断なし)

長男は音更町で生まれた。よく食べて元気な子だった。手がかからない子で、ママ友からはうらやましがられた。実際、自分も悩みはなかった。

3歳児健診で、長男はひらがなもカタカナも教えていないけど読めて、問診で医者に話したら「それは気になる」と、指摘されて腹立たしく思った。その時点で私は発達に対しては何も疑問に思わず、「普通に発達している」と思っていた。思い返すと、医者は気がついていて、私は全然気づいていなかったということだった。

その後、主人の転勤で足寄町へ転勤になった。年中の3月頃に1人で遊んでいた、集団で遊べていないとはじめて知り、佐々木さんにつながった。佐々木さんはすぐに保育所へ様子を見に行ってくれ、WISC検査したところ、「知的には高いけれど、コミュニケーションが上手にとれなかったり、言葉で自分の気持ちを言ったり、説明をしたりするのが難しい傾向がある」ということで、継続してみるということになった。

3. 小学校入学(2008.4)

- ・ 特に1.2年生

ザワザワする教室にいられない
スクールバスに乗れない
絵や作文が書けない
運動会の練習に参加しない
他の子が注意されても泣く など

小学校へ入学。ここでは壁があった。元気な男の子たちが何人かいて、先生は怒鳴り気味の指導をするタイプだった。息子は、他の子が注意されていると自分ではないのに泣き出したり、「怒られる」雰囲気になると教室に居られないことがあった。参観日に行くと、廊下に一人でいた。家に帰ってきたこともあった。

3.4 年生になり担任の先生とは気が合う感じで、得意な漢字テストでたくさん満点取れたら博士とか名人とか評価してくれる機会があり、自信がついたこともあり落ち着いていた。

4. 幕別町に引っ越し(2012.4)

- ・ 5年生で転校

個性的な子が多い学年だったこともあり、
それなりに順応して受け入れられる

他の子が注意されて泣くことはまだあった

担任や養護の先生に相談するも
「全然心配ない！大丈夫よ」と・・・

- ・ 発達支援センターなどのつながりなくなる

心配したのは転校と引っ越しだった。仲間との関係ができて、足寄町より大きな規模の街へ行くことや、小さい頃からの息子を知らない人たちの中に高学年で入るとこは心配だった。担任の先生に特性があるとお手紙を書いてお伝えした。転校してみると個性的な子がたくさんいて息子は全然目立たずで、担任も養護の先生も「大丈夫よ」と言ってくれたこともあり、幕別町では支援センターとつながらなかった。

5. 中学校入学(2014.4)

- ・ 学力が高めだったので、成績が出て自信を持ったり認められたりした
- ・ 人前に出ることを嫌がることなく、学校祭では演劇に出たり、意見発表会で学校代表となり大勢の前で発表したりした
- ・ 学校全体の雰囲気がよく、クラスだけでなくパソコ

ン部でも楽しく活動し、後輩に慕われていた様子
中学校では成績は良いほうだったので、みんなに「すごいね」と言われたり、意見発表で学校代表になった。運動面では体育祭ではリレーの選手に選ばれたり、評価される機会があった。「自分に一番自信があった時期」と、息子が自分で言っていた。はたから見ると何の心配もない子、もし自分が他の親であっても、「何でもできちゃう子」と思っていたと思う。

6. 高校入学(2017.4)

- ・ 覚える量が多かったり、あまり興味のない教科ではなかなか点数が取れなくなってきた
- ・ 一緒に計画を立ててあげると取り組めるが、自分で計画を立てて取り組むことは難しかった
- ・ 反応が大きいことを面白がられ、からかいが続いた時期があったようだ(高2の頃)
- ・ 将棋部では楽しく活動し、学校は皆勤賞

高校は、十勝管内で一番の進学校へ行った。ちょっとずつ暗雲が立ち込めてきた。勉強するところをしばるとか要領がわかってくると思うが、それができずひたすら最初からきっちり勉強して間に合わない、ちょっとずつ苦しくなってきた。やる気はあるのに手をつけられず、卒業できないと困ると思い、一緒に計画を立ててやっていた。

高2の時に、反応が大きいことを面白がられてからかわれていた。毎日ちゃんと学校へ行っていたし全然わからなかったが、春休みくらいに担任から「もう大丈夫ですよ。その子たちとはクラスを離しましたから」という対応だった。その学校は学力を伸ばすのには一生懸命だが、人間形成は一生懸命ではないのだな、とがっかりしたのと悔しかった思いがある。その後も毎日学校へ通い、卒業した。

7. 大学入学(2020.4)

- ・ 親元を離れ、下宿暮らし
- ・ 洗濯や掃除などは自分でできていた
- ・ 単位がほとんど取れなかった

レポートが提出できなかった(?)

リモート授業での発言(チャットの書き込み)ができなかった(?)

できない自分に落ち込み、パソコンを開くことも億劫に・・・

夏頃から通った自動車学校は順調に卒業し、自動車免許を取得！

- ・ 大学からの呼び出し(保護者)
 - 保健の先生からいろいろ告げられる
 - 「緘黙かと思うほどしゃべらない」
 - 「グレーゾーンではなく完全にブラック」
 - 「教授に発達障害の理解を深めるのは無理」
 - 「他の学生に迷惑」 などなど

- ・ 更に下宿の管理人さんから
 - 「隣の部屋の子から声がうるさく(←奇声?)
 - 迷惑だと苦情があり、これ以上下宿には置けない」
 - 「障害があることを隠していたのか」
 - 「障害があることがわかっていたら、最初から入居させなかったのに」

↓

困り果て、足寄の佐々木浩治さんに相談
→ 自立援助ホームを紹介してもらい引越(2020.11)

- ・ 生活や気持ちは安定するものの、後期もほぼ単位が取れず自主退学(2021.3)

大学は、受験で国公立大に合格した。家から車で2時間くらい場所で、寂しさよりもいろいろ心配したこともあったが一人で生活してくれるまでになったと、ただただ成長が嬉しかった。

1年生の10月末に前期の成績が送られてきたところ、単位がほとんど取れていない、あんなに真面目だし学校へも必ずというほど行っていたため驚いた。オンラインだったからかとか思いながら、ショックだったが前向きに行くしかないと思っていた。でも下宿も居られなくなり、どうしようもなく佐々木さんに連絡をして相談したところ、日置さんと運営している『自立援助ホーム』を紹介してくれ、11月に引越した。そこから頑張ってみたが、後期も単位が取れず、自主退学をして大学は終了した。

8.実家に戻る(2021.3)

- ・ 先にバイトをしていた長女の紹介で近所のスーパーでバイト

目標:お金を貯めて車を買おう！

- ・ 漢字検定に挑戦し、準2級、2級に合格
- ・ 病院(精神科)に通院し、障害者手帳(精神3級)を取得(2022.2)

息子は精神的に大丈夫だったが3月に幕別町の自宅に帰ってきた。4月から通信制の大学に入るか迷った。卒業はできても、その後の就職や誰にも頼れないのは不安だと思い、1年はゆっくりすることにした。バイトを始め、車を買う目標と、得意な漢字を勉強して漢字検定に挑戦することにした。

この年にはじめて受診した。こんなに時間があることもなく、手帳を使うも使わないもそれはその時に決めれば良いと思い、通院し2月に手帳を取得した。

9.専門学校に入学(2022.4)

- ・ 車を購入し、自宅から通える専門学校(情報ビジネス科)
- ・ 順調に単位を取得でき、2年で卒業
- ・ 現在は、専攻科に進み大学卒業資格取得を目指している
- ・ 就職に向けてどうしていくか模索中

コミュニケーションスキルを高めるには？
どのような職業に就きたいのか&適しているのか？

就職活動をどのように進めていくか？

2年制の専門学校の情報ビジネス科に入学した。専攻科に進み、今は3年生。大学卒業資格の取得と卒業を目指している。今は就職に向けてどうしていくかを思っている。コミュニケーションスキルを高めた、就職活動をどうやっていこうかという時期になっている。

10.大学で直面した大きな困難

- ・ 単位が取れない
- ・ 暗記をしてテストをするという形式ではなくなっている
- ・ 積極的な発言、瞬時に言葉にすることが求められる

- ・ それぞれの科目でそれぞれの教授からレポートなどの課題が出る

提出期限が重なる → どれからどうやれば → どれもできない → 自己嫌悪

- ・ 困った時に人に聞けない、聞ける友達がいない
- ・ 適当にできない

困った時に人に聞けないところが弱みだなど思う。聞ける友達がいない、友達というのができたことがなかった。中学校の輝かしい時期にも、友達とか親友とか自信を持って言える人がいない、そこが苦しかったと思う。当時は友達の作り方を教えるということは、友達はいないとダメと言っているみたいになると思い、いつかできるのかとか、あまり深く追求したことがなかった。

11. 発達障害の理解や受け入れが・・・

- ・ 学校現場や療育機関にいと気づきにくい現実の厳しさ

私たち関係者の常識はまだ世間の常識ではない

「迷惑な人」という扱い

周囲の理解が得られず、本人が「普通」に近づこうと頑張るしかない

「発達障害」という言葉はある程度浸透したかもしれないが偏見も・・・

→ 住むところがなくなるという大きな不安

◇

12. 上手くは行かなかったが・・・

- ・ やってみてダメ → あきらめがつく → 次への道と切り替えができやすい
- ・ コロナの時期でなければ(対面授業だったら)の思いもあるが、困難に直面する時期が遅くなっていただけかも → やり直しがなおさら大変

大学は、「あなたが選んできたのだから頑張ってこちらに合わせなさい」という感じだった。大学によっても違うしだんだん変わっていくと思うが、息子が通っていた時点ではそこまで理解が進んでいない、とショックを受けた。この先ちょっとずつ変わっていったらいいと思う。

支援者の話から対話により学びを深める

玉手美和子

児童発達支援・放課後等デイサービス きらりこ

はじめに

交流会型トークセッションは、「参加者が対話する中で、思いを共有すること、新たな視点を見つけること、明日からの仕事に元気をもらう」ことを趣旨として実施することをお伝えした。

交流会トークセッションのきっかけとして、2人の方から話題を提供していただいた。

話題提供1

佐井川友美さん(当別町子ども発達支援センター)の発表

支援での悩みは多い。少人数のグループ支援場面で、どこまで子どもを見守り、どこから手助けするか悩む場面があり、周りを見て私自身がドキドキしている。具体的には、担当している子どもが思いをことばで伝えられるように支援しているが、他児とのかかわり場面では、もめごとの時に担当している子どもが「今ボク使ってる！」の主張は望ましい行動だが、その場面を大人の見かたで仲裁すべきか、子どもの味方でいるべきかと考えてしまう。このような場面での対応や考え方のヒントが欲しい。

話題提供2

山本恵里加さん(芦別市子ども発達支援係)の発表

保護者とのかかわりに悩みを感じる。

支援が必要な子どもを事業所や医療機関につなげるための保護者へのアプローチのタイミングについて悩んでいる。先日、相談でつながっているご家族に医療機関の受診を含めて勧奨したが、その時には返答がなかった。後日、ママ友から勧められたことで医療機関につながった。私は上手く対応できなかったのかもしれないとがっかり

した。また、コミュニケーションが苦手な保護者に対してのアプローチに反省している。保護者は度々困り感を訴えていたが、苦手意識から保護者に関われなかった。

グループタイム

グループタイムは、参加者42人が6グループに分かれて対話を行い、前後半合わせて1時間学びを深めた。

以降は、グループ毎に記録していただいた物を基に様子を記載した。

1. 第1グループ

〈保護者支援について〉

・就学前になり病院受診へ動き始めた保護者。保護者が受診と思ったタイミングで行ったと思う。それまでも担当が変わりつつも必要性を伝えてきた。

・まずは、ここ(相談や事業所)に来てくれたことを受け止め、そこから、就学先や病院の選択にどう繋げていくのか。保護者とは、子どもの全体像の共有はしているが、拒否の強さを感じる。

・保護者にどう伝えるか、いつ伝えるか。保護者に合わせたかかわり方を見つけるのが難しい。コミュニケーションが苦手な人もいるので、壁をなくしてかかわる。

・成人でも子どもでもどの世代も保護者対応は難しい。保護者同士の困り感を伝え合う場が月1回あり、この機会が考えるきっかけになっている。

・保護者とは送迎時に会うのみなので、何に困っているのかつかめない。並行通園している保育園や幼稚園と連携して同じ見解で保護者と話をしている。社会資源を活用してほしい。

・「発達って何だろう、を園だよりで発信した所、保護者から話をしてくれるようになった。発達障害から話さず発達から話すこと、障害観を払拭する（お先真っ暗な日本人の障害観）こと、で土壌作りをしっかりとしていくことで、保護者の気づきにつなげていく。早く言えばすっきりするということではないと思う。

〈支援場面での悩みについて〉

・「どうしたい？」と本人に聞く。大人が決めない。意欲を受け止めながらその子に合った支援の仕方です。

・遊びの環境が不足しているのでは。遊び込んでいないからトラブルになる。遊びの中で子どものかわりを増やす。

・ホワイトボードを使って文字イラストを使って、状況を説明し話し合いの場を持ちお互いを理解することや折り合いをつけていく。

・玩具を手から離したら他の子に取られてしまうことを伝えていく。

・その子その子によって求められるかわりは違う。「針がここまで来たら」「物々交換」などの対応、納得できない子もいる。

・見守る

・「先生だったらこう思う」ひとりの人間としての意見を、ぼそつと言うのも大事。

・自分の気持ちを表現するためのひとつの方法として、絵で思いを伝える支援。定着までは難しい。

〈その他〉

・発達支援センターへ園から紹介されて来るが、園でも必要性を伝える。センターがあることは園側としてありがたい。ひとつのきっかけになる。何でもかんでもセンターへは？

・札幌は事業所が乱立。どれがうちの子に合うのか迷っている保護者。「とりあえず事業所へ」と言われて行ってみたが、家では困っていないから来られた側も困惑する。

2. 第2グループ

〈子どもに対しての介入の仕方について〉

・「子どもの発達に合わせて寄り添い共有する」子どもが出来ない時は、小集団に参加しながら、大人が見本を見せながら繰り返し行う。

・個別的

・大人がモデルを提供することは必要だが、本人がどう思っているか探るのが難しい。

・「わからない」を伝えるようにしているけれど、反射的に「わからない」と言うようになった。

・発達検査の評価を見て保育に活かさないか。結果が数値だけで示されることもあり、対応が難しいこともある。

〈保護者対応について〉

・3町村の教育委員会や保健師さんとのやり取りが大変。

・直接的な対応が少ない。

・通園に繋げるのは難しいと感じる。

〈就学に向けて〉

・保護者の気持ちに寄り添いながらも事実として伝えること、環境を整えるのが難しい。

・小学校との連携が難しい。（人によって対応が違う）

3. 第3グループ

〈おもちゃや場所の取り扱いについて〉

・ひとりひとりの発達を押し返ることが大切。話せると言ってもその子その子によって違うので、「貸して」の言葉が分かっているか、衝動的に言っているかもしれない。

・「こういう時にどうしたらいい？」と練習してみても？周りの先生とも「どう？」と話し合ってみる。

・人数や環境によっても変わるのではないかな。

・その子の段階、特性の話だけでは分からないが、その子を知ったうえで、大人とやり取りをして、子どもを把握していく所から環境調整等の方法も有りではないだろうか。

・子どもの分析が必要。

・0～1歳児に対しては、繰り返し気持ちを代弁しながら言葉をかける。10秒ルールを取り入れている。いろいろ試してやりやすい方法を見つける。

・4, 5歳児の対応は、職員間共有で関わり方を話し合う。助言をして本人に考えさせている。ダメと言っている相手の子の事も共有していけると良い。

・先生が演技をして貸し借りのやり取りを見せる。

・他の職員と見立ての違う事があるが、色々な視点があるのは良いと思う。

〈保護者との関わり〉

・親に言うのはとても勇気がいる。まずは雑談で信頼関係を結んでから言えるようになって言うようにしている。何度も失敗している。その子の幸せのためにと言うスタンスでやっている。良い所8困っている所2のバランスで。

・信頼関係が大切。困り感を聞いて受け入れて。保護者の背景も受け入れてあげる。療育機関を併用している場合は併用先の話も聞く。自分だけだと主観的になってしまう。

・保護者の背景、顔色や変化を見て「顔色悪いけど大丈夫？」とかそんな所から始める。

・言葉の選択を慎重にして、言い回しを考えながら行っている。

・丁寧に伝えても、意図とは違う理解や捉え方をされてしまうこともある。次のステップを伝えていのに、今の所では邪魔と感じているように見える。

・信頼関係は出来ていたのに、他の職員の言葉で崩れることがある(あった)。

・保護者がレベルの高いことを求める時は、時間をかけてゆっくり現実の様子を伝えていく。スモールステップで。半年や1年前の様子と比較するなど。

4. 第4グループ

〈保護者支援について〉

・就学に繋げていくことの難しさを感じる。

・支援者が言うより、医療機関利用者が言うと受診に繋がることが多い。

・保護者との信頼関係が出来ていると急に心を開く瞬間がある。

・医療機関受診時に担当者が同行して、医師との面談をサポートすることもある。

・関係者が受診の必要性を感じていても、保護者は診断を聞きたくない。けれど、今必要なことは聞きたい気持ちを持っていることがある。

・保護者への伝え方が難しい。

・保護者とのつながりを大切しており、就学後も園に来て相談をする保護者もいる。

・保育士が必要と思ったタイミングで療育に繋がられない。保護者が必要と思ったタイミングで介入するしかない。

・本町では関係機関の連携が出来ているので、保護者が必要性を感じたタイミングで繋がられている。家庭での困り感はその家庭毎のタイミングがあるように思う。

・立場によって伝え方の難しさがあり、町全体の連携が求められる。

・保護者に寄り添って言葉を選び、タイミングを計る必要がある。支援者はチームワークと役割分担が必要。

・関係者のそれぞれの立場と役割を認識し、チームワークで対応。

5. 第5グループ

〈支援場面での悩みについて〉

・折り合いの付け方の難しさや言うタイミング、その子の目標(支援者が共有、平等の視点がある)に合わせた対応。

・憶測で動かず、色々な見方、視点で考えよう。

・子どもを知ること。

・環境の見直し。

・学ばせたい場面であれば、目の前で見本を見せる。

- ・見立てと予測。周りの状況、動きからの読み取りが大切。
- ・貸すことが出来る気持ちを認めて、経験を重ねる。
- ・視覚情報に訴える。
- ・貸さない理由を聞き認め、フォローすることも大切。
- ・色々なパターンを伝えることも私たちの仕事では？
- ・「今だけ貸してね」「他の子も我慢している」「今日ダメだって」「でも3個はOK」のように色々なパターンのかかわりを見せていくことで、受け入れられる幅を広げてあげられる。

〈保護者とのかかわりについて〉

- ・ドクターから伝えてもらうなど、外部の人。
- ・根拠がないと伝えられない。
- ・あえて役割を変わってもらうなどして、チームワークで対応。
- ・母が納得しても父がダメなパターンもあり、両親で見学に来てもらうなどの対応も。
- ・家では困っていないため、集団場面での子どもの困り感を受け止められない場合には、子どもの困り感を伝えることで理解が進む場合もある。
- ・職員間で子どもの困り感を共有出来ない。家庭でも<落ち着きがない>程度の抑えで、園でもあまり気にしていない。子どもが困る前に、支援に繋がれないかと考えている。

6. 第6グループ

〈実際に困っていること〉

- ・児童発達支援と放課後等デイサービスの事業所で、保護者をどう巻き込んでいったらいいのか悩んでいる。
- ・何に寄り添ってあげられるか(ひとりひとりに対して)
- ・どこから介入していけばいいのか悩む。子どもたちに解決できるようになってほしくて見守っていたいけど他のスタッフが介入してくることがある。

- ・保護者対応しているスタッフがいるので、自分がかかわることはあまりない。
- ・実習で玩具の取り合いになっても子は他の玩具があるからいいやと思うのか。
- ・幼稚園保育園に通う子と療育に通う子のニーズが違うのではないか。
- ・子どもへの対応については、ひとりひとりの特性を理解し寄り添いかかわるか、支援を必要としている子へのタイミングで介入する。子どもの様子で見守ることもあっていいと思う。安全面と不快感がある場合には大人が止める(介入する基準)。

〈保護者のかかわりについて〉

- ・愛着に問題がある親子など母の気持ちが落ち込んでいたりしていても話をするタイミングが上手く取れない。後日懇談になるとその時の落ち込みは解消されていることも多いので難しい。
- ・家庭の背景は子どもの安定にも繋がる。
- ・おしゃべりして受け止めてくれる仲間としての存在が親には必要なのではないか。
- ・保護者の茶話会や父が参加出来るものを企画している。
- ・家では良い子、集団では困り感があるケースは、園の行事の様子を見てもらい話をする(共通の姿)。
- ・連絡ノートなども保護者は楽しみにしているので、保護者が読みたいと思うように配慮して書いている。
- ・支援計画の内容を理解してもらうことで子どもの状況を理解してもらうように考えている。
- ・羽幌では、ケース会議には保護者も参加してもらっている(2回目から)。
- ・関係機関の中で役割分担して、親の相談と子どもの相談の担当を役割分担している。
- ・保護者の困り感に対して上手くアドバイスできないことがあり、周りに相談している。
- ・望ましい支援者とは、話(辛いこと、不安なことを)を聞いてくれる人だと思う。

おわりに

グループタイム終了後、グループタイムを共有する意味で、参加者からキーワードを発表してもらった。以下記載。

学び、すごいなー 保護者との信頼関係 自信を持った方が チームワーク 悩みは一緒
誠実 難しい 悩みすぎないように 外に出よう 出会う 伝える 職員間の協力 子どもを見るのは難しい いつもちゃんとする みんな大変なんだ 元気 難しさ 連携は大事 保育は奥深い 悩んで 良かった 共感 学び 日々学び チームワーク それぞれの つながり 保護者の心の悩み 学び タイミング 伝えるって難しい 保護者の気持ち 寄り添う チームワーク 連携
が挙げられた。

担当者としてのまとめ

交流型トークセッションとして初めて参加者同士が交流する取り組みだったが、多くの方が《支援者の話から対話により学びを深める》に参加されたことから考えると、支援者として様々な悩み

を持ちながら業務に当たっておられることを感じた。

また、最後に参加者全員からいただいたキーワードを分類してみると、共感し合うことば「共感」「すごいなー」「みんな大変なんだ」「悩みすぎないように」「難しさ」「悩みは一緒」、学び続ける姿勢のことば「学び」「日々学び」、事業所内外とのかかわりの大切さを表すことば「連携」「チームワーク」「職員間の協力」、保護者とのかかわりについてのことば「信頼関係」「保護者の心の悩み」「保護者の気持ち」「伝えるって難しい」となり、参加者で共有出来たように思った。支援を必要とされているお子さんも十人十色、支援者も十人十色、ご家族の背景も様々、支援する側の背景も様々であること、支援の方法も百人百通りなのだと思う。そのような中でも、正解を探しながらエビデンスを求め、それをケースにあてはめつつ支援を続ける日々の中、同業者からの話を聞きヒントをもらい明日への活力に変えていくことがこのトークセッションの意義だと感じた。

親子のそだちの物語

野島 彩(保護者)

柿原 勝(NPO法人にしのだぽーと)

愛下 啓恵(札幌国際大学)

はじめに

本論文は3人の共同執筆であるが「筆者」が述べる部分は主に野島である。

自己紹介

筆者の長男は、1歳8ヶ月の時に、小児精神科の医師に広汎性発達障害と診断されたことをきっかけに、長男への関わりを通じて、自身が感じたこと、学んだことや体験したことを手記にまとめていくようになった。

長男は、現在高校生として学校生活を過ごしており、今回は、当時の手記をもとにしつつ、最近の現状も含めて執筆する。

自身の障がい観とその変化・理解とは

筆者は、精神科で診断される障がい者に対しては、漠然と、知的に発達が遅れている、普通とは違うといった認識を持っていたので、長男が診断されたときはショックで一日中泣いて過ごした。しかし翌日には気持ちを切り替え「障がい」について調べ尽くしていく中で「challenged」という言葉に出会い、自身の無知を知ると同時に、百八十度意識が変わった。

障がいについて新たな知識と理解を得たことが筆者を前向きにさせ、障がいという特性以上に、目の前にいる一人の人間、長男をより深く知ろうとすることを大事にし、表面的な結果ではなく、過程を大切に接することとなった。

息子への関わり

筆者は、何気ない日々の生活での体験、例えば食事の時間や衣服の着脱などを重視して接してきた。一方、失敗に対しては、息子は今チャレンジを

しているのだと前向きに捉え、支えることが自身の役目と考えていた。

生まれてから小学校卒業まで

1. 生まれてから

筆者は、インターネットや書籍から独学で知識を得つつも、そこを一番には決してせず、目の前の長男と向き合うこと、目の前の長男の姿から自身が感じたことや思うことを大切にしていっていった。

また、支援する側の存在の重要性を再認識し、常に自身を奮い立たせてきた。

2. 感覚について

筆者は、出産時、長時間酸欠状態になったことで、脳がダメージを受け、中枢神経の働きに影響が出たのではないかと考えるに至り、様々な課題も中枢神経の影響によって起こると考えることで大変苦労しながらも前向きに対応することができるようになった。

「前庭覚」・「固有覚」・「触覚」の課題についても自身で調べて、その知識をもとに、日々の生活の中で、長男が困っていることを想像して、掛ける言葉にも日々注意しながら接する。特に食事と衣服の対応にはとても苦労した。

他に「身体排除」の重要性についての重要性についても知り買い物をしていると突然走って出て行ってしまふ、初めての場所を極端に怖がるといった長男の行動の理由を深く考えるようになった。

3. 幼稚園での副園長との出会い

長男が3歳になった時、幼稚園探しを始めたが、その際、園がどのようなことに重きを置いているのかを意図的に質問して、長男に合うかどうかを判断していった。結果、行事の出来栄えを回答す

る園は避け、職員全体が特別支援教育について力を入れている園を選ぶことになる。

副園長は、長男の行動をよく観察し、その行動の奥にある意味を想像して、丁寧に対応してくれた。その副園長に対応に筆者は、長男に対しての視野を広げることもなった。

さらに、副園長だけでなく、担任はもちろん、担任以外の保育者や事務員までも、長男の特性を知ってくれていたことや、同じクラスの協力的な保護者の姿勢にも大きな安心感を覚えた。

4. 家庭での関わり

筆者は、幼稚園入園前に、2歳から療育を受けられるように手続きをしたり、自身も療育施設でアルバイトをして学びを深めていった。

食事への対応や着衣や入浴の課題に対して、意識を逸らせる「ながら食べ」を取り入れたり、長男が眠りについてからスキンシップをたくさん行い、触れられることへの抵抗感を少しでも軽減させようとしたり、水鉄砲で楽しんでいる時に、顔に水をかけて慣らすといった方法を取り入れた。

また、一日に公園を3、4箇所も巡り、初めての場所に少しずつ慣れるようにしたり、公園で楽しく遊びながら、低緊張や体幹の弱さや身体排除といった課題の解決にも取り組んでいった。

公園の遊具で遊ぶ際には、援助を求めることの大切さを長男に何度も教えていった。長男も遊びの中で、どのタイミングで援助の言葉を使うべきかを身につけていくこととなった。

さらに、公園では長男よりも少し大きい子が一緒に遊んでくれることで、自然と順番や譲ってもらうことや逆に仲間に入れてもらえないといった社会的な体験を遊びながら身につけていくことができた場であった。

5. 療育について

長男が通った療育施設は、ねらいがしっかりとしており、筆者も多くのことを学ぶ場となった。

低緊張や体幹の課題を踏まえて、使用する椅子に工夫をして、叱られて自信を失う経験をさせな

いようにしたり、気分が乗らない時は無理強いをせず、好きな製作をたくさん取り入れたりしていた。

長男は、特に廃材遊びに夢中になり、はさみの使い方や細かい作業が飛躍的に上達した。手先を使い続けたことで言語中枢の発達が刺激されたのか、言葉や感覚過敏の課題も改善が見られるようになり、当初は考えていなかった小学校の普通級に入学することになった。

6. 小学校入学から卒業まで

幼稚園と小学校とでは、支援の手厚さが違うことを想定していたので、小学校入学は筆者にとって大きな不安であった。しかし、長男が通うことになった小学校は閉校前最後の入学生ということもあり、1クラスの人数が16人という少人数の環境であったため、それがとてもよかった。

長男は助けを求めることが身についていたこともあり、クラスの子どもたちに日々助けてもらいながら小学校生活を過ごすことができた。

ノートへの書き写しや身支度の準備など手伝いが必要なことももちろんあったが、入学前から好きだった工作への興味はさらに広がり、様々な物を作り続けていった。

長男が小学2年生の時、購入したばかりの長靴をはさみで切ってサンダルにしてしまうという出来事が起きた。その際、筆者は安易に止めず、その姿を見守り続けるという対応をとり、完成品を褒めると、長男もとても喜んだ。

この長靴の出来事は、長男にとって、今後も工作を続ける意欲につながり、筆者にとって、長男への今までの関わりの集大成的な要素を感じる。

その後、長男は卒業の際に、工作を通じて身につけた自信について作文を記している。

嬉しかったこと、悲しかったことについて

1. 悲しい気持ちになったこと

保護者として悲しい気持ちになったり、見聞きして疑問に感じたことの一つ目は、最初からでき

ないと保育者らが諦めて対応しているように感じたこと。二つ目は、子どもに対して、威圧的であったり、交換条件をだすような言葉を掛けること。三つ目は、大人にしか理解できないような、いやみやたとえを交えて笑ったりすること。四つ目は、泣くという子どもにとって大事な意思表示や SOS のサインに対して否定的な言葉を掛けること。五つ目は、子どもが泣くまで保育者が追い詰めたりすること。六つ目は、散歩前や午睡前に、子どもが行きたくないと言っているにもかかわらず、トイレに執拗に行かせようとする事。

筆者も、保育者や支援者らの対応には、それまでの背景や流れがあることをもちろん想像しており、一部分にのみ焦点を当てて判断してはいけないことは重々承知している。

2. 嬉しい気持ちになったこと

保護者として嬉しい気持ちになったことの一つ目は、長男の言動の奥にある理由を想像して説明、代弁してくれたこと。二つ目は、小さな成長に対して、一緒に喜んで報告をしてくれたこと。三つ目は、困ったことが起きた時に、必ず家庭の様子を確認して一緒に考えてくれるたこと。四つ目は、子育てを支えてくれるような励ましの言葉を掛けてくれたこと。五つ目は、レスパイト利用を積極的に勧めてくれたこと。

中学3年生の受験と現在

1. 進路決定と面接試験について

筆者は、進路に対しては、長男本人の意思を尊

重することを決めて見守っていく。そのような中、長男は自ら工芸系の高等学校を志望した。

ただし、その高等学校は全寮制であり、親元を離れることとなるが、長男はとても前向きに捉えており、その姿に筆者はとても感動を覚える。

面接試験の際に、寮生活に対して質問されるが、その際に長男は、助け合うことの大切さを訴える。さらに、寮生活には衝突が起きることもあり、その際はどうするのかという質問に対しても、相手の話をよく聴き、自分の視野を広げていきたいと伝える。

長男の面接での返答を後に聞いた筆者は保護者として、今までの長男への関わりの意味を改めて振り返ると同時に、今後も長男を信じ見守っていきたいと思う。

2. 現在の様子

4月に入学後、入寮してから半年が経過したが、筆者が想像していたよりもはるかに連絡は少なく、高校生活を楽しんでいるようである。

もちろん、寮生活の中で、多少気の合わない子や他者の言動に疑問を感じたりすることはあるらしいが、自分なりに考えて日々過ごしているようで、そんな姿を温かく見守り続けていきたいと筆者は思っている。

おわりに

本論文では共同執筆者の執筆中の論文と重複するため、重複部分をさけて執筆した。

ある親子のそだちの物語から、現場からの視点

中村孝博

NPO 法人にしのだぽーと

はじめに

野島氏のこれまでの子育ての営みとお子さんと野島氏が歩んできた「育ちの物語」に敬意を示すとともに、それをわかりやすく文章化していただいたこと、また、それを保育分科会へ提供していただいたことに感謝する。

野島氏の発表を受けて、野島氏親子の「育ちの物語」を保育現場ではそれをどう考えていくか。筆者なりに問題を整理する。本会会員の皆様の今後の保育の参考にさせていただければ幸いである。

育ちの物語の視点

野島氏の子育てには、いわゆる定型発達の子どもにはない、苦悩、不安、迷いなどが多かったと推測される。また、保護者が直面する「わが子の障がいの受容」という大きな課題を「チャレンジド」という言葉から本児の特性を受け入れていった経過と保護者の心情がよくわかる発表である。

野島氏の発表から私たち保育者がその親子にどのように寄り添うかには、2つの視点がある。「保護者の育児の歴史への寄り添い」と「子どもの育ちに応じた保育内容」である。

1. 保護者の育児の歴史への寄り添い

「保護者の育児の歴史への寄り添い」は柿原氏の原稿を参考にする。

2. 子どもの育ちに応じた保育内容

筆者は長く保育を営んでいた者の一人として主に「子どもの育ちに応じた保育内容」を提案する。

支援の視点から

1. 幼児理解

野島氏の幼児理解は非常に科学的で示唆に富むものである。目の前の幼児の特性をどのように理解していくかの観察力と、目の前の幼児の困りをどのように克服していくかの試行錯誤と実践力は、私たちが保育を営む上でもとても参考になる。

2. 具体的な支援方法

「手伝って」と言えることの大事さは長年保育をしていた筆者も感じている。特に発達障がいと呼ばれる幼児は独特の過敏さ、自分の思い通りにいかない時の感情のコントロール、曖昧なルールを学習しづらい特性などで、集団生活で困難を抱えている。その困難を自分一人で解決しようとして、それがかなわなかった時にパニックになる。集団生活の困難さを解消するには信頼できる大人を頼ることが一番である。

野島氏がそのことに気が付き日常生活で克服していった子育てである。野島氏の子育てから私たち保育者が学ぶことが多い。

保育者の視点から

野島氏からは、保護者の視線で園への要望や希望を伝えてもらった。特に野島氏からの「悲しい気持ちになったこと」の発言は保育者として耳が痛い内容である。保育者の一人として謝罪したい。保育者一人一人は幼児の理解をもとに有効な支援を実践したいと思っている。しかし、保育者の事情はそれぞれで、特別支援を営むまでのスキルが欠けていたり、自分の理想とする実践を展開できなかつたりする。保育者の多くはその葛藤を抱えながら保育を営んでいる。

筆者が考える特別に支援が必要な幼児の保育の課題を提案したい。

1. 寄り添うということ

筆者の理解では「寄り添う」とは「想像力」だと思う。ある特性を抱えた幼児の保護者がどんな思いで子育てを営んでいるかを想像できるかである。この想像力を欠くと保護者を傷つけてしまう。一方で特定の保護者に強く寄り添うことで、その他の保護者とのバランスを欠くことになる可能性もある。

2. 経験年数

一般的には若い保育者は目の前の保育で精一杯であり、保護者の気持ちまで思いを寄せていくには多くの時間がかかる。職員の入れ替わりの激しい職場では保育者が保護者の気持ちに寄り添うまで育たないこともある。

3. 価値観、保育観、研修

ある特性を抱えた幼児を園としてどう対応するかは、多くの園で、園内研修で特別支援教育を学んでいるはずである。しかしまだその研修が不十分な園もある。そして園の方針は園の建学の精神、理事長や園長の保育観などに大きく影響をうける。そのため保育者一人の力では園の方針を変えられないことがある。

4. 保育の変換

「特別支援教育」は、平成19年（2007年）から「学校教育法」に位置づけられた。「障害のある子どもの自立と社会参加をするための主体的な取り組みを支援する」という視点に立ち、「対象となる子ども一人ひとりの教育的ニーズを把握し、その持てる力を確認して伸ばし、学習や生活で抱える困難さを軽減し改善するための適切な指導や支援を行う教育」を指す。

2014年2月に障害者の権利に関する条約が効力を発効する。（参照：障害者の権利に関する条約 | 外務省 HP

https://www.mofa.go.jp/mofaj/fp/hr_ha/page22_000899.html)

第24条では、障害者が障害に基づいて一般的な教育制度から排除されないこと及び障害のある児童が障害に基づいて無償のかつ義務的な初等教育から又は中等教育から排除されないこと。そして、障害

者が、他の者との平等を基礎として、自己の生活する個人に必要とされる合理的配慮が提供されることが示されている。（この項のみ、法律に使用される「障害者」を使用する）

また、特性を抱えた幼児は増えている（参考資料：北海道幼児教育振興基本方針 令和5年度～令和9年度（筆者注：2023年度～2027年度））。それに伴い、保育も変わっていかなくてはいけない。多くの園では法律の施行や幼児の実態から保育の見直しを図っている。一方で昔からの経験や勘、伝統を大事にするあまり「本園では昔からそうやってきた」と、保育の見直しが難しい園もある。

5. 保育内容や行事の見栄えと成功

保育は誰のために行うのであろうか？この簡単な問いは、本会会員の皆様は即答できるはずである。一方で、保護者への見栄えを意識しすぎる保育をみかける。見栄えや成功を求める保育ではその期待に応えようと頑張る幼児は評価されるが、頑張っても保育者の期待に応えられない幼児もいる。保育者はその幼児をどう評価するのであろうか？

6. 保育者の人間関係、同僚性

保育者間の人間関係は保育に影響する。良好な人間関係を基に行われる保育は安定するが、人間関係がぎくしゃくしていると、その不安定な気持ちが幼児と接するときに出てしまう。保育の営みには保育者それぞれの保育観がでる。特に特別支援教育は保育者の保育観、感性、経験年数、研修、担当する幼児の実態などが相関し合い、とてもデリケートで保育者の本性や力量を問われる内容が含まれてくる。そのお互いの保育観を尊重しあえるのはとても難しい営みではある。お互いの保育観を尊重しあえる関係ができないと人間関係はなおさら不安定になる。

7. 労働環境、保育者のメンタル、支援者の支援

特別支援教育では「支援者の支援」をどうしていくかが言われてきた。同じように幼児教育でも保育者のメンタルをどう支えるかを考えていけない。園長や先輩職員がその役割を担うのだが、外部から

招くことも有効である。その支援が不十分だと保育者のメンタルは不安定になる。

幼児、保護者、保育者を取り巻く環境から

幼児、保護者、保育者それぞれの立場で優先する事項があり、基本的にはお互いにそれを尊重する姿勢が望ましい。しかし、実際の保育実践ではそのバランスがとても難しい。園の意見が強すぎてしまうと保護者は我慢しなければならないし、保護者の意見が強すぎると「クレーマー」や「モンスターペアレント」と評価される事態もありうる。そもそも保護者との連携に消極的な園もある。

1. 園の保育方針とのミスマッチ

園には園独自の保育方針がある。その保育方針と幼児の特性がうまくマッチすれば幼児も幸せだが、保育方針と幼児の特性がかけ離れた場合、幼児も園も苦勞する。

2. 園の基礎的環境整備と合理的配慮

園がある特性を抱えた幼児を受け入れる場合の環境整備はどのくらい整っているのか？環境整備が整っていない場合、合理的配慮が大きくなる。つまり保育者一人一人の努力や負担で補う部分が多くなっていく。

共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）概要（平成24年7月23日）では、「合理的配慮とは」障害のある子どもが、他の子どもと平等に「教育を受ける権利」を享有・行使することを確保するために、学校の設置者及び学校が必要かつ適当な変更・調整を行うことであり、障害のある子どもに対し、その状況に応じて、学校教育を受ける場合に個別に必要とされるものとし、「基礎的環境整備」は「合理的配慮」の充実を図る上で、必要な財源を確保し、国、都道府県、市町村は、インクルーシブ教育システムの構築に向けた取組として、「基礎的環境整備」の充実を図っていく必要があると定義されている。

3. それぞれの信頼関係

保育の営みには瞬時にいろいろな問題が起きてくる。また保育では思いもよらない事故も起きる。そのため保育者は予想もしない問題や事故を前にすると慌てて、間違った対応をしてしまうことがある。保育者もミスをするが見逃してもらえないこともある。保育者は完璧な人間ではない。また、特別支援教育では支援の効果がすぐに表れることがないため、成長の停滞からネガティブな評価を受けてしまうことがある。SNSなどのメディアの発展に伴い、保育者のネガティブな評価は大きく広がる時代となってきている。管理者や保護者からのネガティブな評価は保育者の自信を失う。

4. 他の保護者からの要望

周りの保護者から「あの子にいじめられた」「あの子に叩かれた」と苦情が届くことがある。その対応に時間をとられ、保育者のストレスになる。しかも、誠意をもって対応しても納得してもらえないことも多い。保護者からの苦情を過度に意識すると保育にも影響を与える。トラブルを未然に防ぐあまりに友達同士のやりとりに保育者が介入しすぎることにもなりかねない。

終わりに

親子の子育ての歴史に寄り添うこと、そして子どもの成長に応じた保育内容を考えていくことは、考えれば考えるほど、難しい課題である。筆者の発言は野島氏からは「保育者の言い訳」とお叱りを受けるかもしれない。

これまで述べた通り、それぞれの園ではいろいろな状況の中で保育を営んでいる。保育に正解はない。それぞれの園でこの難しい課題に取り組んでいけなくてはいけぬ。その鍵は「同僚性」だと思う。同僚性とはお互いの保育観を尊重して、問題解決に向けて議論できるかにかかっている。ぜひ本会会員の皆さんは職場で管理者、先輩、同僚、後輩と「親子の子育ての歴史にどう寄り添うか」を話し合ってみてほしい。

野島氏の発表から数度「チャレンジ」という言葉が出された。本当にチャレンジしないといけぬのは誰なのか？そのことを会員の皆さんと考えていきたい。

「ある親子のそだちの物語」に触れて 改めて保育者・療育者が自問すること

柿原 勝（NPO法人にしのおさぽーと）
愛下 啓恵（札幌国際大学）

はじめに

本論文では、保育分科会の野島の「そだちの物語」と中村の「ある親子のそだちの物語から、現場からの視点」を踏まえて、改めて保育者・療育者が日々の子どもの関わりの中かで重視すべき点などを、今までの保育現場の経験や様々な研究などから筆者らが感じたことをまとめた。

ただし、本論文を通じて「今後の対応はこうあるべき」といった考えではなく、後々参加者に新たな視点が加わることや子どもたちや保護者への見方に変化が生まれたならば幸いだと考えている。

なお本論文では、共同執筆者の論文において重複部分があるため、それを避けて執筆する。

見方、寄り添いとは

1. 「見方」について

子どもたちの姿や行動に対して、保育者・療育者がどのような見方をするのかによって、対応や言葉掛けは大きく変わる。

例えば、障がい者に対して、健常者に近づけようとする考え方や見方で保育者・療育者が接することは、障がい者側の視点に立った際、保育者・療育者は味方になれていないのではないかとさえ思う。

柴田（2016）は、子どものことをより知りたいと接してきた中で、無意識のうちに子どもの気持ちよりも自分（大人）の気持ちで動かしていることが多いと反省している。

筆者らは、保護者同士の立ち話から、見方が変わると言葉掛けが変わることを知った。

ある園児 A の行動に対して「落ち着きがない」

という見方をするのではなく「行動力がある」という見方をし、別のある園児 B の態度に対して「引っ込み思案」という見方をするのではなく「観察力が凄い」という見方をするのである。

同じ人間に対しても、どのように見るかで大きく変わることを顕著に示した例だと感ずる。

2. 「寄り添う」について

寄り添うことは、決して容易ではなく、目の前の子どもたちの行動や態度の奥にあるものを常に推測、想像をしながら、よく観ていくことが欠かせないものだと筆者らは考える。

寄り添うという意識は確かに大切だが、この言葉の意味の広さに、状況や場面も踏まえずに安易に述べることへの危惧を感じている。

田中（2006・2022）は、子どもたちの行動や態度に対して「仮に」理解して「実際に」支援をするというやり方を保育・教育現場等へ提案し、自身も児童精神科外来において、想像し、仮説を立て、検討し、日常を覗くということを心掛けていると述べている。

ヨシタケ（2013）の「りんごかもしれない」という絵本は、想像力の大切さや奥深さを再考させられるものだと感じている。

保育者・療育者の意識

ここでは、保育者・療育者が日々心掛ける意識について述べていく。

第一に、保育者・療育者が、偏見・先入観で子どもたちを見てしまう懸念を指摘したい。

目の前の子どもの様子や姿をよく観ないで、診断名や過去の行動歴から判断して、できないと決めつけてしまうといった残念な対応を筆者らは保

育現場で数多く見てきた。

子どもたちは、皆一人ずつ違うという、その当たり前のことを再認識していかなければ、保護者との間に齟齬が生まれ、関係性が悪化してしまうことにつながると考えている。

星山(2016)は、様々な子どもが受け入れられる教育は、寛容で多様性を尊重しており、居心地がよく安心できる環境で、多様であることは豊かであると述べている。

第二に、子どもたちの食事など何気ない作業や動作は、実は複雑なものであるという視点や意識をもつことが重要ではないか考える。その視点や意識を現場の保育者・療育者がもっていないと「できて当然」や「できないのは家庭の躰の問題」という捉え方になりがちで、言葉掛けも自然と否定的な言葉になりやすく、スモールステップの考え方が有効なのではないかと筆者らは提起したい。

第三に、子どもたちにとって、失敗や間違いが大切な経験になると強調したい。子どもたちの多くは、失敗や間違いを好んでしているわけではなく、一生懸命に取り組んでも失敗してしまうものである。問われてくるのは、その時の大人の対応なのだと考えている。

蒔田(2004)の「教室はまちがうところだ」の絵本や相田(2007)の「つまづいたって」の詩はそのことを明確に、端的に示していると思う。

第四に、感覚過敏といった本人しか分からない独特な感覚に対して、その大変さなどを想像してみることが第一歩だと提案したい。

自身の感じ方を基軸に、全く違う感覚の他者がいることを想像せずに接してしまう保育者・療育者は、強引だったり、的外れな言葉掛けや対応をしてしまったりする傾向が強いと感じる。「大丈夫、大丈夫」と保育者らは優しい言葉を掛けているつもりだが、この言葉では感覚過敏のある当人の不安や恐怖は全く解消されない。それどころか、不安や恐怖が増してしまう可能性が高いことを認識する必要があると思っている。

ニキリンコ(2004)をはじめ、発達障がいの診断名がある当事者が自身の感覚を語っているものが書籍化されているので、それらを参考にし、保育者らが視野を広げていくことが期待される。

感覚過敏の違いだけでなく、そもそも人が自分以外の人の気持ちを分かることはないと大阪市立大空小学校元校長の木村泰子はあるオンラインの講演会の中で述べていた。

人の気持ちが分かることがないのであれば、対応はできないと保育者・療育者が諦めてしまうのではなく、分からないとしても、分かってほしい、より知りたい、何とかしたいと思う気持ちを持ち続けていくことこそが大切で、それこそが真の寄り添いにつながるのではないだろうかと思っている。

出会い、保護者支援、家庭との連携について

1. 出会いの重要性について

筆者らは、支援者との出会いによって、子どもたちが大きく変わっていく姿を何度も経験してきた。子どもたちは、基本、自分で支援者を選ぶことはできない。だからこそ、保育や療育に携わる者は、一人の人間として子どもたちに真摯に、誠実に向き合って接し続けていくこと、保育者・療育者との関わりが、その子どもの後々に大きな影響を与えることを忘れてはいけないと考える。

黒柳(1981・2023)の「窓ぎわのトットちゃん」「続・窓際のトットちゃん」の内容は、幼児期・学童期の出会いが、その人間の後々の人生を支えることを証明するものだと思う。

2. 保護者支援について

保育や療育には正解はないと考えている。もちろん正解がないからといって何でもよいわけではなく、それぞれの保育・療育観を踏まえて、子どもの状態像をよく観察し、その情報を全体で共有することは欠かせない。

保護者にとって、担任だけでなく、園全体の職員が我が子をみんなでみてくれているのは、とて

も心強く、それこそが、自然と保護者の気持ちを支えることになる。

3. 家庭との連携について

園と家庭、保育者・療育者と保護者の連携の重要性も感じている。

保育者・療育者らは、園や施設の姿だけを見て、その子どものことを分かった気にならず、園や施設以外の家庭での姿などを保護者から教えてもらい、多角的な視点でみていくことを忘れてはならないと考える。

子どもを「みんなで一緒に」という意識を持ち続けることで、互いのよさを認め合うといったことにもなり、子どももよりよい方向へ向かうことにつながる。

保育現場で感じたこと

1. 「そもそも」を踏まえる

保育現場でよくみられる課題の1つに、何のためにやっているのかという「そもそも」を考えず「みんながしているから」や「先輩に言われたから」といった惰性的に取り組んでいる保育者が少なくない例も見られることをあげたい。

子どもたちに言葉掛けや説明をする側の保育者が、ねらいも分からずに何となく取り組んでいるようでは、子どもたちに真意は伝わるはずはなく、何が大切か、何のためにやっているのかをその都度考えることはやはり重要であろう。

伊瀬(2018)は、東京都足立区教育委員会が学校教育と幼児教育の連携を強化する中で、乳幼児期の育ちを見直すことの必要性にたどり着き、平成25年から足立区立園で愛着形成のための担当制保育を始めた取り組みを取り上げている。保育現場で、従来「あたりまえ」といわれていたことを一つひとつ見直していくと、保育がよくなるという実践例を紹介している。この伊瀬の紹介事例の中で、最も参考となる点は、担当制保育を始めたという形式的なものだけではなく、保育者同士が「子ど

もたちにとってどうなのか？」という議論をし続け、考え続けている姿勢の方であると筆者らは強調したい。

2. その気にさせる

筆者(柿原)は、幼稚園勤務時代に、発達心理学の教授から「俗にいうイケてる保育者(=子どもとの関わりが上手な保育者)というのは、子どもをその気にさせるのがうまい」ということを教わった。その教授の言う通り、ルールを押しついたり、正論をかざしたりして、子どもたちを動かそうとする保育者より、子どもたちの声を丁寧にひろい、子どもたちの考えに上手にのって進めていく保育者の方が、子どもたちが意欲的に、主体的に課題等に取り組んでいる姿を何度も見てきた。

3. 遊びは大切

幼児期の遊びの重要性については、平成元年の幼稚園教育要領の改訂の際に改めて強調された。あれから30年以上が経過してもこの土台の重要性は変わっておらず、その意味を現場の保育者は再認識する必要があると考えている。

子どもたちは、遊びを通じて、楽しみながら自然とスキルを身につけていくことが多々あり、その延長に自信をつけていくこともある。また、遊びを通じて、小さな失敗や、やり直すといった経験をすることもできる。

上記のことからも、保育者が遊びの大切さ、奥深さを知らずに日々何となく過ごしてしまうのは、とてももったいないことと思う。

4. 子どもが安心して過ごせるには

筆者らは、子どもが大人に対して、拒否、要求、援助要請の3つを訴えることができれば、安心して過ごせる可能性が高くなると考えている。これは、子ども側の問題ではなく、保育者側に問われるものであり、子どもが言いやすい雰囲気のある保育者であること、自分からは訴えられない子どもを察知できる保育者であること、言葉にできない子どももいるのだという想像力のある保育者であることといった3点が欠かせない。

5. 長所を伸ばす

長所を伸ばすことと、その子どもたちの長所に、大人が心からの賛辞を贈ることの大切さを強く感じている。しかし、実際の保育現場では長所よりも短所や欠点に目が向く傾向にあり、短所や欠点を指摘するような接し方をしている例も少なくないと感じる。

佐々木(2007)は「欠点のない人間なんていないように、長所のない子どももいない」と述べており、保育者が子どもの長所を見つけていき、そのことを褒めていくことの方が重要だとも述べている。

6. 発達障がいに対して

筆者らは、保育現場で発達障がいの診断のつく園児らと多く関わってきた。

その経験から、発達障がいについての知識を身につけていくことはとても大切だと感じている反面、保育者・療育者は、知識が身につくにつれて、目の前の子どもたちのことをよく観る前に、その知識で決めつけてしまうという課題も感じるようになった。

汐見(2014)は、保育や教育の基本として「子どもたちに、何がしたいのか、何をして欲しいのかを聞き続けること」だと述べており、機械的に子どもを当てはめてしまうことに警鐘を鳴らしている。

7. 待つことの大切さ

子どもたちの成長には、保育者・療育者の見守り、待つ姿勢が重要だと考えている。

ただし、この姿勢について、昨今「子どもの主体性を重視する」を「保育者が何もせずただ見ている」と間違っただけで解釈していると思われる例が見られることに危惧を感じている。

目の前の子どもたちの姿をよく観て、今は助言をするのがよいか、自分で考えるのを待つのがよいか、その都度、子どもたち個々に応じていくことが欠かせないのであり、何もしないで見守ることではない。

保護者の心の奥にある気持ちを聞いて

野島の論文にある「保護者が悲しい気持ちになったり、疑問を感じたりしたこと」を改めて知ると、保育現場当時の自身の対応については、恥ずかしくなるのを乗り越えて逃げ出したくなるほどである。きっと子どもたちや保護者の多くは疑問を感じたり、我慢をしたりしながら過ごしていたのではないかと想像すると、反省と謝罪の言葉しか見当たらない。

このことから、保育者・療育者は、謙虚さや誠実さを常に持ち続けて日々接していく必要があると痛感する。

おわりに～ネガティブ・ケイパビリティ～

大会テーマである「分からなさに向きあう」とはどういうことなのか改めて振り返ってみる。

保育や療育には、ある意味正解はないが、専門家として正解を求められることはしばしばあり、そこに葛藤が絶えない。

一般的には、保育者・療育関係者は専門家とよばれる立場にあるが、実は分からないことのほうが多いとさえ感じている。そのような中、専門家として、時にはわからないことを正直に伝えつつ「調べてみます」「考えてみます」と他者と一緒に歩み続けること、一生懸命、真摯に向き合い考え続けるという過程こそが大切なのではないかと思っている。

帯木(2017)は「どうしても答えの出ない、答えが決まっていない、どうしても対処しようのない事態に耐える能力」をネガティブ・ケイパビリティと述べている。

汐見(2023)は、その帯木の言葉に対して「じっくりとその問題に取り組む続けるという意識、それも否定的にならないで、いつか答えは見つかるような姿勢で接し続ける態度、この粘り強さこそが、保育の専門性の要件」であると述べている。

そういう意識と態度を持ちづけることは容易で

はないが、子どもたちのため、その子どもたちを支える保護者のため、そこに力を注ぎ続ける保育と療育は、決して苦だけではなく、楽しく、尊く、素敵なものだと思っている。

(参考文献)

柴田愛子 (2016) こどものみかた春夏秋冬 福音館書店 p. 12.

田中康雄 (2006) 軽度発達障害のある子のライフサイクルに合わせた理解と対応「仮に」理解して「実際に」支援するために 学研

田中康雄 (2022) 僕の児童精神科外来の覚書 子どもと親とともに考え、悩み、実践していること 日本評論社

ヨシタケシンスケ (2013) りんごかもしれない ブロンズ新社

星山麻木 (2016) 気になる子もみんないきいき保育 ここからはじめよう、幼稚園の特別支援教育 河出書房新社 p. 64.

蒔田晋治・長谷川知子 (2004) 教室はまちがうと

ころだ 子どもの未来社

佐々木正美・相田みつを (2007) 育てたように子は育つ 小学館文庫 p. 85, p. 74.

ニキ・リンコ・藤家寛子 (2004) 自閉っ子、こういう風にできてます! 花風社

黒柳徹子 (1981) 窓ぎわのトットちゃん 講談社

黒柳徹子 (2023) 続窓ぎわのトットちゃん 講談社

伊瀬玲奈・他 (2018) 0・1・2歳児保育「あたりまえ」を見直したら保育はもっとよくなる! 学研

汐見稔幸・他 (2014) 発達障害の再考 風鳴舎 pp. 126-128.

帯木蓬生 (2017) ネガティブ・ケイパビリティ 答えの出ない事態に耐える力 朝日新聞出版 p. 3.

汐見稔幸・他 (2023) エドゥカーレ (no. 113) 臨床育児・保育研究会 pp. 4-5.

座長のまとめ

愛下 啓恵

(札幌国際大学 人文学部心理学科)

第38回乳幼研保育分科会は約70名の方々に参加いただき、野島氏の「親子の育ちの物語に触れる」で開幕した。続いて、中村孝博先生の提言、柿原勝先生および私・愛下による提案(発表者:柿原)をご紹介します、最後に、本研究会の佐々木会長より総括の言葉を頂戴した。

先ずは忙しい毎日にもかかわらず、講話の依頼を快諾下さり、ご家族の歴史を丁寧にまとめ、話して下さった野島氏に改めて感謝申し上げます。

野島氏は、お子様の障がいをどのように受容し、理解し、向き合ってきたのかを深い洞察をもって語られた。また、発達特性や子育てに伴う困難への日々の工夫について、論理的かつ学術的な視点で共有され、保育や療育(発達支援)に対する率直な思いや支援への期待が強く伝わる内容であった。

中村先生は「ある親子の育ちの物語から、現場からの視点」をテーマに、幼児、保護者、保育者を取り巻く環境を考慮し、野島氏の講話の視点、支援や保育者の視点から多角的に話された。長く幼児教育の場でご活躍された先生ならではの、実践的な知見に基づく重みのある提言だったと感じる。柿原先生と愛下は、テーマ『ある親子の育ちの物語』に触れてあらためて保育者・療育者が自問することのもと、幼児教育の実践者としての経験から、保育や子育てにおける反省を交えつつ、理想と現実の難しさを具体的かつ共感的に提示した。その内容は、参加者間の共通認識を深める役割を果たしたと考えられる。また、野島氏の講話を多角的に解釈し、先行研究や著書、著名人の言葉を引用しながら、保育や療育(発達支援)における知見を提案した。本分科会は、参加者に新たな視座、

現場の実践に変化を促すことも意図していたのだが、これらがその契機となれば幸いである。

保育や療育(発達支援)に従事する者が親子と関わる時間は限られており、その中で家族一人ひとりの歴史全てを把握することは現実的に困難である。佐々木(2019)は、親子の支援を検討していくためには、子どもの現在の悩みや不安に捕らわれすぎず、見通しを持った育児へと母親自身が未来を思い描くことにつながるかわりができるために、親子の過去を知ることに加え、未来も推測しながら向き合う姿勢が重要であると述べている。

大学で筆者が指導していたある卒業生は、学生時代に母親から自身についての子育ての話聞いたことが、親子の歴史や親心を想像する助けとなり、目先の状況や短絡的な視点に囚われがちな保育者にならずに済んでいることを述べていた。今回、家族の歴史に触れる機会を得たことは、一般化が難しい個別の事例ではあるものの、親子の過去・現在・未来を見据えた支援の重要性、家族の歴史や親の心情を理解する姿勢の必要性を深く認識する貴重な契機となることを願っている。

野島氏の講話から、保育・療育(発達支援)施設が親子の成長を支え、安心できる環境を提供してきたことが伝わり、その中で野島氏自身も安心して子育てに取り組んでいたことが想像された。子どもの健やかな成長には、親自身が子育ての当事者として成長し、自己実現を図ることが重要である。それを支える環境づくりも私たちの使命の一つであることは確かであろう。最後に、恩師の「子育てに大切なのは温かな群れと安心できる場とつながり」という言葉が思い出された。今後も保育分科会は、子育てを支える「温かな群れ」として、安心とつながりを育む場でありたいと考える。

子ども達の成長を紡ぐ支援・関わり

～各職種の立場から見た保護者支援～

佐々木美春

こころとそだちのクリニックむすびめ

はじめに

今回のテーマには、各職種から見た保護者支援という副題がついており、筆者は『医療の立場から見た保護者支援』という医療の立場からであった。しかし、原稿をまとめていく中で医療の中で感じたことだけでなく、今まで自分が就いてきた様々な職種の中で出会った保護者のこと、自分の中での葛藤や感じたこと、失敗経験などを伝えることが広い意味での保護者支援となるのではないかと感じたのである。

今回の原稿が医療の現場からの話がメインではないため、ご意見はあると思うが、ご了承願いたい。

自己紹介

筆者は幼児教育の大学を卒業後、当麻町母子通園センターに療育指導員として勤務し、その後北海道クリスチャンセンター家庭福祉相談室に入職した。そこでは児童発達支援や放課後等デイサービス、保育所等訪問支援事業の児童発達支援管理責任者として15年間勤務した。この期間は主に低年齢の子どもとその保護者と関わっていた。

その後、江別市こども発達支援センターに相談支援専門員として4年勤務し、現在はこころとそだちのクリニックむすびめに臨床発達心理士として勤務し、約4年が経っている。

療育現場での一コマ

1. 筆者(自分)の意見を押し付けていたあの頃
「先生の言ったとおりに、支援学級に行かせて良かった」と発達支援事業所を卒業した保護者に言われた。この一言を聞いて筆者は嬉しかった反面、自分の一言でこの子の人生を決めてしまったのではないかと不安になった。

この頃の筆者は発達障害のある子どもは、支援学級で手厚い支援を受けた方が良いと思っていた。そのため保護者に「支援学級に行った方が良い」と強く保護者に伝えていたように思う。

今はそのやり方を変え、支援学級と通常学級の両方のメリット・デメリットを伝え、あくまでも家族や本人が決定することを大事にしている。たとえ決定した意思が筆者の意見と食い違っていたとしても、家族が出した結果を尊重する。もし途中で修正が必要になった時に、保護者から相談してもらえよう関係作りが大切だと感じている。

2. 定型発達の子どもの追いつけようと必死だったあの頃

その頃の筆者は支援目標で『はさみが使えるようになる』と目標を立てていた。

はさみが使えるようになることは大事なことである。しかし、はさみが使えること自体が目標ではなく、作りたいものを作るためにははさみが使えるようになることが必要であって、はさみが使えること自体を目標にしてはいけなかったと

反省した。

「〇〇ができるようになる」といった定型発達の子どもの追いつけるような目標ではなく、その子の将来を見据えた上で、今その子に何が必要なのかを根底に置き、発達段階を踏まえたスモールステップでの支援が大切だと思う。

今は、はさみが使えないのなら誰かに「手伝って」と言えることも大事な一つなのではないかと思っている。

相談支援の一コマ

精神疾患を抱えている保護者に頼りにされ、業務以上のことを頼られた。誰も頼っていなかった保護者に頼りにされたことが嬉しくなりそれに応えていたが、しだいに必要以上に頼られるようになってきて、正直その保護者と会うことが重荷になっていった。

そんな自分の状況がある人に相談したところ次のように言われた。

「あなたを頼ってくれたということは、その人があなたに心を許したということで、そのことはとても素晴らしいことである。しかし、そのことがあなたにとって重荷になっているのだとしたら、別の支援方法を考えたらよいのではないか」それを踏まえ筆者が考えた方法として、

1. 相談者が頼れる場所を複数にする。
2. 筆者の業務の枠組みを伝え、筆者に出来ることと出来ないことも確認する。また相談者がして欲しいことはどこに行けばやってもらえるのかを一緒に探すようにする。

相談者の一生を背負うことはできない。支援者が側にいなくても自立できるためにはどのようなサービスが必要なのか、誰に頼れば良いのかを一緒に考える必要があると思った。

この保護者とは、その後、程よい距離を保ちながらできることとできないことを一緒に考えることができた。今では困ったことを自分から支援者に発信できるようになっている。

医療の現場の一コマ

1. ことば（言語化）で自分の気持ちを相手に伝える大切さ

それまではことばを持たない子どもの支援が多く、『なんとなくこう思っているだろう』で済ませていることが多かった。また、小さい子どもの支援には保護者の意見が強く反映していたため、子ども自身の気持ちを聞くことは少なかった。また、この頃の筆者は保護者の意見と子どもの意見が一緒（同一）だと思っていた。

医療現場で勤務するようになり、子どもと1対1で接することが増えた。その状況もあり、子どもとじっくり接していく中で、子ども自身も自分の意見を持っていることに気が付いた。たとえその子が、どんなに幼くてもその子は自分の持っていることばを使って相手に気持ちを伝えられるのだと知った。それは、保護者の意見ではなく、その子自身の意見なのと思った。

自分のことばで相手に伝える大切さ、そしてことばを持たない子どもには筆者がその子どもに代わって言語化していく大切さを知った。

言語化するという事は相手に自分の思いを伝える大切なツールであるということも改めて知ったのである。

2. ことば（言語化）で伝え合う関係性

子どもは「〇〇したい」「〇〇になりたい」と言っても聞いてもらえなかったり、わかってももらえなかったりする相手だと自分の気持ちを伝えられない。筆者は『子どもが素直に自分の気持ちを伝えられる、言語化してもよい存在である』と思ってもらえる人でありたい、と思っている。

4 医療の中にいることで感じたこと

1. 医療って何だろう

医療の中にいる筆者は子どもたちに何をすべきなのかをずっと考えてきた。田中哲は著書（参考文献）の中で『今発達障害の問題という、何ができるかできないか、どのような能力が欠けてい

るのかどこが問題なのかというレベルでその人が考えがちである。・・・中略。私たちは問題を起こす子どもを前にすると、その問題ばかりが目がいってしまい、その子どもの心がどうなっているかが見えなくなってしまう。これはとても怖いことなのではないか』と述べている。そしてこうも述べている。『子どもにとって大切なことは、自分の心の育ちを大切に思ってくれる大人に出会うこと。それは医療だけではなく教育・福祉すべての人に言えることである。』と述べている。

筆者は微力ながら医療の中で子どもたちの心の育ちを大切に思うことを今後も続けていこうと思っている。

2. 発達支援って何だろう

様々な職種を経験し、感じたことは発達支援とは出来ないことを出来るようにすることではないと思うのである。

筆者が考える発達支援とは、

- ・その人が自分のやりたいことに気がついてその気づきを応援したり、支援したりする。
- ・その気づきに従って選択させる。
- ・その実現に向けて一緒に考え、行動する。
- ・その人の「やりたい」と思うことを邪魔せず、お手伝いする。

そして子どもや保護者に正直であることと筆者は思う。

5 クリニックむすびめの日常

むすびめに来院した子どもはまず医師のいる診察室に入室し、医師に挨拶をする。診察室で医師と挨拶をした子どもは、たくさんの遊具がある発達支援室に入室する。

子どもによっては挨拶だけですぐに筆者のいる発達支援室に入ってきたり、まっすぐ発達支援室に入室する子もいる。また、診察室で医師に日々の生活のことや困っていることなど話をする子どももいる。

発達支援室では、筆者は子どもに毎回「今日は

何して遊ぶ？」と声をかける。すると子どもは「○○したい」と言いながら柵から自由に自分のやりたい遊びを選ぶのである。

初めて来院した子どもは、「なんでもいい、先生の好きな遊びでいいよ」と言うことが多い。そのような時に筆者は、『子どもがやりたい遊びを私に伝えてくれるまで待つ』ようにしている。子ども自身が自分でやりたいことを選んだり、見つけることが何よりも大切なことではないかと考えるからである。来院する回数が多くなると、自分から「○○したい」と伝えてくれるようになる。そんな時に筆者は、子どもと筆者の関係が一步進んだことを実感するのである。

筆者が入職した当初、医療の中で筆者は何をしてよいのかわからずに途方に暮れていた。その時に最初に行ったのが四季を感じられる装飾だった。患者さんに季節の移ろいを感じてもらいたいと思ったからだ。すると子どもだけでなく大人もそのミニチュアを見て感想を伝えてくれるようになった。『医療の中に作る日常』が筆者の役割であると田中康雄(こころとそだちのクリニック前院長)は言っている。日々の生活を大切にし、狭義の子どもとの関わりのテクニカルなことよりも自分をさらけ出して遊ぶ、その対等な関わりとそこから保護者に伝える言葉と子どもとの遊びの中で非言語的に伝える思いが保護者支援につながっていると田中康雄は語っている。

様々な職業を経て筆者の中で保護者を支援する視点は角度を変え変化してきたように思う。しかしその中でも変わらないものは『子どもにも保護者にもそれぞれの思いがある。重なる思いと重ならない思い、それぞれの思いを大切にすることである』というところであると思う。

6 子ども達の成長を紡ぐ支援をしている者として

ある時その子の支援で悩んで考えてどうしようもなく苦しんだまま子どもと関わっていた。しかし、次の支援の日に子どもの行動が改善されてい

ることがあった。支援の方法は変えていないのになぜなのかと思いをめぐらせてみた。そして筆者が得た考えは『その子の事をたくさん考え、悩み続けたから』であった。悩み悩んでその子のことを考え続けたことは、子どもにもきっと伝わるのだと思う。

筆者の恩師である伊藤則博（北海道乳幼児療育研究会名誉会長）は『たくさん悩んで、たくさん考えなさい』と日々口にしていたので思い出した。田中康雄はそのことばの先に『そして、たくさん実践とたくさん失敗をしてください。その果てに彼らの真の育ちがあるはず』と言葉を繋げてくれた。悩むだけでなく実践と失敗も大切。失敗を恐れないこと、でも失敗を常に詫げる思いと、その失敗のおかげで次の保護者を支えることができることへ感謝を忘れないことであると田中康雄は伝えてくれた。

たくさん悩んでたくさんその子の事を想う力は、きっとその子に伝わるのだと私は思う。

7そして・・・これからに向けて

これからもたくさん悩んでいこうと思う。そして困ったら職場の同僚やここに集まっている北海道乳幼児療育研究会の仲間に相談すればいい。ここには、自分とは違う職種の仲間がいて、違う見方をしてくれると思う。

筆者は、色々な職種を経験し、子どもの見方が変わった。職種が変われば見方も変わるかもしれない。困ったらいろんな人に相談したら良い、そう思っている筆者自身、北海道乳幼児研究会の仲間に幾度となく助けられて今仕事をさせてもらっている。

今後もこのつながりに感謝しながら、子どもと保護者と関わっていきたいと思う。

〈文献〉

- 1) 田中哲（2016、育つこと育てること
—子どもの心に寄り添って、いのちのことば
社フォレストブック

子どもたちの成長を紡ぐ支援・関わり

～各職種の立場から見た保護者支援～

山口麻絵

社会福祉法人静内ペテカリこどもサポートほっぷ

若手時代に感じていた保護者支援

何もわからなかった1・2年目。保護者支援とは日々の活動の引継ぎや面談のことだと思っていた。保護者と親しげに話したり、保護者からの質問に対して素直に「わからない」と答えたりしている先輩方の姿があった。療育をしている職員は専門家だと思っていたが、先輩方の様子を見ていると、どうやら違うらしいとの気づきがあった。

若手時代に担当していた、小学校に行きたくないと訴えるYさんと、どうしても行かせたい保護者がいた。保護者や担任の先生とどうしたら小学校に行けるかを検討したものの、本人の意志や気持ちはどこにあるのだろうと疑問を持ちながらであった。その際に、子どもと保護者の意見は必ずしも一致していないことに気付いた。

実際に保護者支援に取り組んでみて

転勤族で視覚障害を持つお母さんがいた。「子育て中の苦労をわかってくれる人がいない」「他の保護者とお話しする機会が欲しい」と打ち明けてくれた。浦河ひがし町診療所から学びながら、2020年より「こすもすの会」と名付けた子育て応援ミーティングを立ち上げた。月に2回10:30～12:00まで行っており、子育てに関心のある方なら誰でも参加できる。

「こすもすの会」では子どもたちの本心はどこにあるのかを参加している保護者の方々と考える機会を作っている。それを通して、子どもたちがそこまで考えているのかという発見があっ

た。また、自分の気持ちがなかなか言葉になりにくい子どもに対し、試行錯誤しながら本人たちの意志を確認することに取り組んだ。さらに保護者と子どもが一緒にいる場面で、その子の声を聴く場を設けた。保護者支援は、保護者と子どもの橋渡しであると考えている。

子どもとの当事者研究にも取り組んだ。お友達や兄弟とケンカをしてしまうEくん。もうやらなきゃ良いとわかっているのにやってしまうその状況を「盛り上がり悪魔」と名付け、一緒に研究することになった。初めは保護者も半信半疑であったが、様々な場で発表を重ねる毎に、「こんなに自分と向き合っていたんですね」と本人を認めてくれるようになった。

現在の保護者支援

子育て応援ミーティング「こすもすの会」では保護者の苦労だけでなく、日常を語れる場になったらとの声があった。参加して下さっている保護者の方々の声を受け入れながら、少しずつ形を変えている。

保護者支援の中で苦労していることは、保護者に対し、言いにくいことをどう伝えていくかである。保護者に伝えにくいような子どもの意見だった際に、保護者とどのように対話していくことが望ましいのかを考え続けている。お互いの意見を一旦飲み込んだ後に、分かり合えるところと分かり合えないところを確認し合うことが必要なのではないかと考えている。

教職の立場から見た保護者支援

久保田 健一

江別市立江別第一小学校

これまでの教師としての自分

筆者は「自分の個性が無い」ということに悩んでいた時期があった。しかし、これまでに会ってきた多くの素敵な教師や、子ども達と過ごした日々が、教師としての自分自身を形成してきた。したがって、筆者が保護者とどのようにかかわってきたかを伝えるためには、まず筆者自身が何に悩み、どのように変化してきたかを述べる必要がある。

1. 「お前を待っている子が必ずいる」

大学を卒業して初めての教員生活を、筆者は中学校の期限付き教師としてスタートした。何もかもわからなく、生徒とどうにかかわっていくといいのか悩んでいた時に、先輩の教師に「お前を待っている子が必ずいる。お前だから変えられる子が必ずどこかにいる。」と言われた。その言葉は、今でもずっと大切にしている言葉で、自分だから変えられる子がどの子かわからないからこそ、どの子にも全力で接するように心がけている。

2. 「子どもの目を見て話さない大人たち」

中学3年生の副担任をしていた年、卒業式当日、教室での最後の時間の中で代表生徒が「子どもの目を見て話さない大人たち」という言葉を使った。その言葉を聞いた瞬間、私はドキッとした。そしてその直後に、ドキッとしたことをとても恥ずかしく感じた。筆者は、子どもの目を見ないで話していたとは思わない。しかし、いつも真っすぐ目を見て話をしていたという自信がなかったのだ。子ども達は、大人の様子を実によく見ている。子ども達と真っすぐ、誠実に関わっていくことの大切

さを感じた言葉だった。

3. 当たり前なんてない

教師として8年間過ごし、自分の中での教師としての「型」のようなものができ始めた頃、ある先輩教師と出会った。その先輩には「当たり前」というものが存在しなかった。子どものためになると感じたことは、何でも追及して試してみる人だった。普通はやらないこと、考えもしないことも積極的に試してみる人だった。その結果、子ども達は、その一つ一つに驚き、戸惑い、気づけば笑顔になり、そして大きく成長していた。このような先輩の姿を見て、筆者は「教師はこうあるべき」という枠を知らず知らずのうちにもっていたことに気づいた。その出会いを通じて、子どものためになることに「当たり前」を気にしてはならないと感じるようになった。さらに、この経験を通じて、筆者は子ども達に自分自身をより一層さらけ出すことができるようになった。

この他にも、筆者をつくってきた出会い、言葉はたくさんある。そうした経験を取捨選択し、吸収することで、自分の個性ができていると今の筆者は考えている。そして、これらの経験を通して、自分自身が成長していく過程で、保護者とのかかわり方や考え方も少しずつ変わっていった。

若手時代に感じていた保護者とのかかわり

1. エピソード①「教科書紛失」

筆者が最初に勤務したのは中学校だったが、ここからは小学校における経験について述べていきたい。筆者が、小学校で初めて通常学級の担任を受けもったのは2年生のクラスだった。それ以前

には特別支援学級の担任を1年間経験していたが、その際は3人で1つの学級を担当していたため、単独で1学級を担当することに対して大きなプレッシャーを感じたことを今でも覚えている。そんな中、先輩教師から「若い先生は、保護者たちが助けてくれるから大丈夫だよ」と励ましの言葉ももらった。しかし、当時の筆者には保護者からの優しい言葉は感じられず、むしろ厳しい言葉が容赦なく浴びせられる状況であった。

話が少しそれるが、現在の保護者の意識は昔とは異なり、教職1年目の初任者に対しても高い要求が求められるようになってきている。このような背景の中で、筆者が2年生の担任として少し慣れてきた頃、保護者との関係が悪化する出来事が発生した。

ある日、子どもが自分の教科書を教卓に置いていた際、筆者がその教科書に気づかず、担任用教科書と一緒にしてしまった。その結果、その子は教科書を失い、何日も探すことになってしまった。後に、担任用教科書と一緒にしまわれていたことに気づいた筆者は、その子に教科書を返却した。しかし、その後保護者から電話を受けることとなった。電話の内容は、「先生のせいで自分の子どもをものすごく怒ってしまった」というものであった。筆者はその時、うまく説明することができず、最終的には保護者が「もういいです」と不機嫌なまま電話を切るという形で終わってしまった。この出来事は、筆者にとって非常にショックであり、保護者との関係を改善することができないまま、1年を終えることとなった。

2. エピソード②「体育の評価」

筆者が5年生のクラスを担当している時、体育がとても得意な子がいた。運動能力が高く、どんな種目であっても活躍していた。当時、私が勤めていた学校では、高学年は運動会でよさこいソーラン踊りを披露していて、運動会後に表現運動としての評価が行われていた。体育が得意なその子

は、運動会の練習の時から、なかなか熱心に踊っているようには感じられなかった。評価をする時間においても、その子の踊りに対する姿勢はあまり熱心には感じられず、体育の評価を1つ下げた。すると、通知表配付後の保護者面談の中で、「うちの子は、よさこいを全力で踊ることが怪我につながり、それが習い事に影響するのが嫌だから、よさこいを全力で踊らなかったそうです。先生は、子どもに話を聞いてくれない。」との意見を受けた。筆者は、確かにその子にもっと話を聞く必要があったと反省している。ただ、当時はその言葉に納得することはできなかったし、保護者の厳しい言い方に傷ついた。

若手時代の筆者は、以上の2つの事例をはじめ、さまざまな保護者とのかかわりを通して、子どもに指導するときに、その後ろにいる保護者の存在を過度に意識するようになってしまった。

先輩教師と保護者とのかかわり

前述の通り、保護者とのかかわりの中に難しさを感じていた若手時代の筆者には、先輩教師が保護者とかかわる姿が、とても真似できないもののように感じていた。

先輩は、一見すると些細なことでも子ども達の変化を見逃さなかった。たとえば、子どもの靴がいつもと違う、服が汚れている、髪型が乱れている、話し方がいつもと異なるなど、そんな小さな変化にすら気づき、それを見逃すことなく対応していた。その観察力は、決して監視するためではなく、子ども達が抱える小さな悩みや問題に寄り添い、早期に手助けをするためのものだった。

先輩は保護者とも柔軟に接し、まるで友だちのように笑顔で世間話を交えつつ会話をしていた。こうしたやり取りの中で、保護者との信頼関係を築き、双方の気持ちを理解し合うことにつながっていた。しかし、和やかな雰囲気の中にも、子ども達が成長するために必要な課題については率直に伝

え、改善すべき点を明確に示していた。その姿勢からは、単なる友好的な関係にとどまらず、子ども達の成長を真剣に考えていることが伝わってきた。

さらに、情報共有のスピードも驚くべきものだった。先輩は周囲の職員にすばやく情報を伝え、支援が必要な場合は関係機関との連携が自然に進んでいた。情報の共有や協力体制の構築は、子ども達一人一人に適切な支援が行き渡るための重要な要素であり、迅速な対応によって多くの問題が未然に防がれていたのだった。

若い頃の筆者にとって、このような高度な対応力や人間関係の築き方は、ついていけないと感じることが多かった。当時の私は、周囲の先輩に自分のミスを見られるのを恐れて、こそこそと行動していたように感じる。そのために対応が遅れてしまうことも少なくなく、今振り返ると、もっと積極的に情報を共有し、その場に応じた適切な対応方法を先輩方から学ぶべきだったと強く感じる。そうしていれば、保護者との信頼関係を築く力も、より早く身につけることができたのではないかと思う。

保護者としての見方・考え方

私の妻は教職とは無縁の仕事をしているが、わが子が小学校に上がってから、妻の言動に「なるほど」と考えさせられることが増えた。それは、いかに自分が「学校の常識」に縛られていたかに気づかされる場面でもあった。

たとえば、学級通信についての妻の反応が印象的だった。教師である自分は、子ども達の様子やクラスの活動内容をできるだけ丁寧に、文章で細かく保護者に伝えようと一生懸命に書いている。しかし、妻はその長い文章を前にして「読む気にならない」と率直に言うのだ。自分としては日々の教育活動を共有する大事な手段だと思っていたため、意外だった。だが、妻にとって知りたいことは「文章での説明」より「わが子の様子」であり、

「文章ではなく、どんな場所でどんな表情をしているかがわかる写真をもっと載せてほしい」と言われ、初めて納得がいった。

さらに妻との日常の会話を通して、保護者が何を考え、望んでいるかを少しずつ理解できるようになった。学校側として「当たり前」と考えることでも、保護者にとってはそうではない場合が多々ある。そうした保護者の生の声を聞くうちに、これまで自分の中で当たり前とされていた「学校の常識」が次々と崩れていく感覚を覚えた。

こうして「保護者が本当に求めていることは何か」と考える視点が生まれた。それまでは学校内のやり方に従って物事を進めていたが、今では保護者の視点や気持ちを考えながら、情報を発信することが大事だと実感している。保護者にとって「何が重要で、どう伝えるべきか」を見極めることも、子ども達の成長を支えるために大切な要素だと気づかされた。

保護者と良い関係性を築くために取り組んだこと

保護者との良い関係性を築くために、筆者はこれまでさまざまな工夫をしてきた。

まず、電話についてである。以前、ある保護者から「学校からの電話は大体悪い知らせだと思うので、憂鬱な気持ちで受け取ることが多い」と言われたことがある。それを聞いて、「それなら学校からの電話が嬉しいものになればいい」と考え、その日にあった子ども達のささいな良いことを積極的に報告するようにした。例えば、「今日、図工の時間に黙々と最後まで教室の拭き掃除をしていましたよ」とか、「友達に問題を根気強く教えていたんですよ」といった内容だ。こうした積み重ねを続けることで、保護者とより良い関係を築くことができた。

次に、個人懇談や家庭訪問についてである。ある保護者との思い出が特に印象に残っている。その保護者とは、兄と妹を担当したこともあり、合計4年間関わることになった。初めて、家庭訪問

に伺った際には、厳格な雰囲気をもつ家庭を、少し怖いと感じたのを覚えている。兄を担任していた際には、学校での様子や家庭での状況について、ごく普通の交流をしていた。しかし、妹のときには「勉強が苦手」という話題をきっかけに、筆者ができるあらゆることを伝えようと、教師という枠にとらわれず、さまざまな提案をした。そうすることで、より深く交流を深めるようになった。妹の卒業式を終えた数日後、そのお父さんから「先生は昔は普通のつまらない先生だったけれど、しだいに、何事にも本気で考えてくれて、普通とはちょっと違う先生になった。だから、先生の話の聞こうと懇談会に行こうと思えるようになった。」と言われたことが非常に印象深く残っている。

こうした積み重ねのおかげで、子ども達や保護者から、さまざまな相談を受けるようになった。自分がLGBTであることを打ち明けてくれた子、突然話すことができなくなった子、子ども達とその保護者は、一人一人が本当に違った悩みを抱えており、筆者自身が分からないことも多くあった。けれども、自分の苦手なことや分からないことを隠さず、子どもや保護者と一緒に考え続けたことが、結果として良い方向につながったのだと思う。こうして試行錯誤しながら保護者や子ども達と向き合う中で、関係性を深めることの大切さを改めて実感した。

子どもと本気で向き合う保護者支援

ここまでいろいろと書き連ねてきたが、一番に感じることは、筆者には「保護者を支援している」という感覚はほとんどないということだ。一緒に悩み、「どうしたらいいでしょうね」とお手上げになることもたくさんある。時に保護者が大きく変化することもあるが、大人を変えることはとても難しく、筆者にはその力はない。筆者は筆者が変

えるべきは子どもだと思っている。これは、尊敬する先輩教師から学んだ言葉だが、子どもが変化していくと、保護者の中に「親の需要」が生まれるのだ。その結果として、保護者も少しずつ変わっていくのだと考えている。

とはいえ、筆者はまだ意図的に「親の需要」を生み出すことができていない。そのため、ただひたすらに子ども達と本気で向き合い続けるしかないと考えている。筆者は、最初に話した「どこかに私を待っている子がいる」という思いを大切にしている。しかし、それが誰なのかは分からない。だからこそ、目の前のすべての子ども達に、本気で向き合うしかないのだと考えている。その先に、「先生に出会えてよかった」と言ってくれる子どもが現れると信じて、毎日子ども達と関わっている。

また、筆者は毎年、担任した子ども達に必ず伝えていることがある。それは、「本気になるって楽しい」ということである。この言葉を繰り返し伝えることで、子ども達が本気の表情になっていく瞬間は、いつも感動を覚える。そして、この「本気になることの楽しさ」は、子ども達だけでなく、保護者にもきくと響くものだと思っている。子ども達が本気になり、変わっていく姿を通して、保護者もまた影響を受けるはずと信じている。筆者としての保護者支援とは、このプロセスそのものなのかもしれない。

筆者は、まだまだ未熟で、思い通りにいかないことばかりである。それでも、「本気で向き合う」ことを続ける中で、子ども達にとって少しでも力になればと思う。そして、その先の保護者にも何かを伝えることができればと思い、これからも一人一人と本気で向き合い続けていきたい。

当事者の立場から見た保護者支援

大木裕介（当事者）

自己紹介

筆者は、現在釧路にある NPO 法人地域生活支援ネットワークサロンに所属をしている。

当事者の立場ということで執筆をしているが、自分が他の人と違うのではと思い始めたのは 5 歳頃であった。小学校高学年くらいから他人の感情が分からず、気づいたらいじめている側に回っていたりしたが、幼稚園からの付き合いということもあり、あまり問題にならずに過ごしてきた。

しかし、引っ越しをした後、周りに理解してくれる人も少ない中、気がつけばいじめられるようになり、その後学校に通うこともできなくなった。

それをきっかけとして、精神科に通うようになり、服薬をはじめますが、あまり自分のことを理解してもらえないような感じはしなかった。ただ、惰性と薬への依存で通い続けていたように思う。

興味のあることや趣味に関しては能動的に取り組めたが、学校生活はあまり乗り気にはなれず、中学時代は非行と呼ばれるようなことを繰り返したり、高校も 3 ヶ月で退学になったり、バイトをしても長く続かず、社会とうまく関われずに過ごしてきた。

釧路での生活

筆者は、ずっと関東圏で生活をしてきたが、20 代後半に働いていたアルバイト先で、ネットワークサロンの代表である日置さんと面談する機会があり、釧路の支援の話聞いた。

自分と同じような生活をしていると思った釧路の若者支援のグループが、翌日に仙台で活動していると聞き、筆者も参加を試してみた。具体的に何がよいというのは無かったが、活動に参加してみた際に、悪くないと感じ、縁のようなものを

感じたのと、衝動的な感覚で釧路に引っ越しを決めた。

ネットワークサロンでは同じように生きづらさを持っている男性 3 人で暮らしたり、仕事の紹介を受けて働き方を試したりして過ごした。

障がい福祉の支援を使ったのは、この時が初めてであった。筆者自身、自分の状態が何なのか分からない中、発達検査を受けてみたらよいのではないかと提案され、ASD と ADHD の診断を受けた。これを機に、自分のことが少しずつ分かるようになった。30 歳になった辺りのことである。

受診後の変化

診断を受けたことで、自身の状態に名前がつき、今までの違和感や困り感の理由や原因に説明がつくようになったり、解説を受け入れられるようになったことは嬉しかった。これまで、頑張ろうとしても難しかったことが、ASD の特性ということで筆者の中で整理がつき、自身へのハードル設定を見直す機会にもなった。他の人が当たり前に行っていることなのだから、自分もしなくてはいけないと思っていたことを見直せたことは、とにかく気楽さを感じた。

診断名が分かったことを、とても嬉しい気持ちで母親に報告したが、母からは「気づいてあげられなくてごめん」のような謝る言葉ばかりが出てきて「そういうことじゃない」と思ったが、そう感じたことは伝えていない。筆者は、伝えたとしても分からないであろうと感じることは、あまり意味がないと思ってやめてしまい傾向がある。

自身の障がい名が分かった頃から、障がい者のグループホームや自立援助ホーム、放課後デイサービスなどでパートをしたり、就労支援 A 型事業所で勤務したり、日置さんが行っている支援者の

養成研修などで当事者事例として参加したりしている。保護者支援の専門性はないが、一応支援の仕事をしていることもあり、依頼された場合は、断る理由もなく発表をしている。

筆者は、こだわりがあることに対しては強固になるが、こだわりのない事柄に対しては柔軟なタイプである。

保護者支援の考え方

人と関わる時、筆者の前提としてスイッチを入れる必要がある。それは保護者と関わる時だからとか、誰と関わる時だからということに関係なく、基本的に自分の世界で過ごしている状況では他者を意識していないからかもしれない。関わる時には可不可ない対応をしていきたいと思うことはある。ただ、自身としては無難に対応できた気がしても、相手にとって無難かどうかの判断は難しいので関わり自体は回避しがちである。

直接行う保護者対応を軽視したり、面倒だから避けてしまうというのではなく、筆者よりも保護者対応が上手な人がいる場面は、その人に任せながら、保護者のことをアセスメントしていることが多い。保護者との雑談から、その保護者の趣味嗜好が伝わってくる時には、関わっている子どもへの願いや生活の様子を想像するきっかけになったりもする。そのほうが子どもたちや保護者、一緒に働くチームに貢献できると感じている。

チームで働くことを考えた際、それぞれの得意を活かしあえる方が互いに気持ちよく働けるとも感じている。

自身の体験を踏まえた保護者支援

子ども主体に関わるが多いと子どもの願いと親の願いが入り混じって語られることが多いが、保護者は当事者本人ではないと意識している。これは筆者自身が子どもの頃に親から想像されたり理想として語られたりする像がまったく違ってギャップを感じることもばかりだったからである。

だからこそ、保護者の意向や感情、期待が混じっていると感じる情報の場合は、その情報に振り

回されないように別に置いて、本人と対応するようにしている。

筆者が小さい頃、幼稚園で過ごしていた様子を先生が保護者に伝えている（目の前で自分のことを話されている）時、嫌な気持ちになっていた。自分が言いたいことは自分で伝えられるし、自分の感情と一致しないことを勝手に伝えられることが多かった。だから、子どものタイプによってはその辺りの情報の伝え方もとても気にするようにしている。

支援の現場にいて、保護者と当事者である子ども、そこに支援者も関わる中で作用はし合う面はあるが、個々で存在しているものだと考えているので、それぞれ各々が無理しすぎずに過ごせるような完成形に向かえるのがよいと感じている。

少し前に関わっていた子で、母親が病気になってしまい、父親が仕事をしながら子どものケアをするようになったケースがあった。その子の願いは「お母さんとお父さんと変わらずに過ごすこと」で、両親もその願いに応えようとしていた。しかし母親の病状は悪化するばかりで、父親は母親の分も頑張ろうとしていたが、どんどん無理が溜まってしまっているように感じた。互いの願いは同じだったが、現実的には無理があったので、お互い個々で存在していることを大事にできる文化があれば、無理しすぎず新しい形の暮らしを考えることもできるのではないかと思い、新たな視点について考えさせられるケースだと思った。

保護者の不安を減らす支援

筆者が主体的に保護者支援に関わったりした経験はあまりないが、大事なことだとは感じている。多くの子どものために、生活の中での親の影響力は大きい。その親が不安やストレスを持ち過ぎながら子どもと関わるとそのマイナスな面がでてしまう傾向にある。だからこそ、保護者支援をすることで、その親が抱えている不安やストレスを少しでも減らすことができれば、子ども（当事者）にとってもきっとプラスに働くと考えられるからである。

人は機嫌が良く過ごせている方が良いと思っている。

障がいがある子や初めての子育てをしている保護者は、不安や状況が分からず、訳が分からなくなっている時も多いと思うので、ただただ話を聞いただけとか、ちょっとした情報提供でも意味があるのかも知れないと思っている。支援をしている側は当たり前だと思っている情報も、全く保護者は知らないことがある。また、大変な状況の人ほど、周囲に同じような経験をしている人が少ないように感じる。そうなるとう理解してもらえる機会はより減ってしまい孤立感が強くなると思われる。

だから、子どもを通じて関わる支援者は重要な存在になると考える。

まとめ

筆者は、30歳になってからASDとADHDの診断を受けたが、子どもの頃からクセのあるタイプであった。自身はもちろん母や父も支援に繋がることなく今まで来た。自分の育ちを振り返ると「もしあの時、こうだったら〜」と思ったり、これまでの子ども・若者たちとの関わりの中でも「こういうものがあつたら・・・」ということをぼんやりと考える時がある。

保護者支援として大切なポイントを筆者なりにまとめると、4点があげられる。

1つ目は、母の気持ちを吐き出すところは必要であること。小さい頃のエピソードを聞いても「初

めての子だったし、分からなかったの」ということが多い。その時にちょっとした話ができ「もしかしたら…」と気づける機会があつたら状況は変わっていくのではないかと考える。

2つ目は、保護者が子どもの育ちにくさを知ったり納得できる説明を受けられる場であること。

保護者達が知り合うことができ、子どもの傾向を知り、関わり方を分かりやすくまたは詳しく知る方法があれば良いのではと感じている。

3つ目は、子どもの生まれつきの仕組み（特性など）を悲観したりせずに済む保護者の感覚や周囲の環境である。30歳になっても悲観した筆者の母親が「もし小さい頃に障がいがあると知つたらどんな反応したのか・・・」と想像すると恐怖を感じる。正しく特性を理解したり、対応の方法が分かればそうならずに済むのではないかと考えている。

4つ目は、保護者自身が課題を抱えている場合の子どもの育ちの担保についてである。保護者の中に、まだ幼い子どもの部分があつたり、特性や病気、精神的な余力の無さがある場合に、子育てをサポートする仕組みが今の社会の中ではまだまだ不足しているように感じる。

もちろん、ケースバイケースであつたり、個々の資質によるところが大きい面もあるので、どうしていくのがよいのか簡単に結論がでることではないと考えている。ただし、考えて続けていくことには意味があるとは思っている。

座長のまとめ

北山 竜大

社会福祉法人 札幌協働福祉会

児童発達支援センター たくあいアクティビティ「むう（夢）」

トークセッションでは、「保護者支援」をテーマに福祉・教育・医療・当事者の各立場の方々に登壇していただき、若手時代に保護者支援に対して感じたことや経験したこと、そして、その経験を踏まえて、現在行っている支援について語っていただいた。発表を聞いた後に、江別市立江別第二小学校の佐々木龍之介先生に若手の立場から感じたことや感想を語っていただいた。社会福祉法人 静内ペテカリ こどもサポートほっぷの山口麻絵先生には福祉の立場から語っていただいた。

先輩職員と保護者の対話を聞く中で、保護者と子どものニーズが異なるのではないかと感じ、本人の意思や気持ちがどこにあるか考えて支援し、保護者と子どもの橋渡し役となるという話が印象に残った。この気付きから保護者と共に子どもの言葉に耳を傾け、思いを受け止めて支援をすることが大切であると考えた場になった。

江別市立江別第一小学校の久保田健一先生には教育の立場から語っていただいた。

保護者との信頼関係の構築において、周りとの情報共有や関係機関との連携を迅速かつ丁寧に、正確に行うことの大切さ、子どもと向き合う中で、「本気になるって楽しい」と伝えることで保護者にも何か伝わるものがあるという話が印象に残った。子どもに真摯に向き合うことで必要な関わりが見えてくる。それを踏まえ、保護者との関係作りを進めていくことが保護者・子ども両者にとって大切になると考える場になった。

こころとそだちのクリニックむすびめの佐々木美春先生には医療の立場に加え、福祉や相談

支援の立場も含めて語っていただいた。

保護者にとって頼れる場が複数あることが保護者・支援者にとって大切であり、各場面で誰に頼れば良いかを共に考えていく。その中で、進路等の決定を家族や本人がすることが大切であるという話が印象に残った。この言葉が当人のやりたいと思うことを邪魔しない、やりたいことに気付き、応援・選択するという発達支援の考え方に繋がり、保護者と共に考えることが子どもの成長に繋がると考える場になった。

NPO法人 地域生活支援ネットワークサロンの大木裕介先生からは当事者の立場から自身の経験等を含めて語っていただいた。

保護者の不安やストレスを軽減できる支援は子どもにとっても良い方向に進むと感じており、保護者が不安を吐露出来る場や保護者同士の関わりを持てる場、そして、子どもとの関わり方を知る場を作ることが大切であるとの話が印象に残った。保護者の不安を解消していくことが大切であると自分自身も考えていたことであったが、その不安の解消が子どもに良い影響を与えることまで考えることが出来ておらず、保護者支援の大切さをより感じる場になった。

登壇者の方々の発表を聞き、保護者支援において、まずは子どもと真摯に向き合い、どのような思いを持って、その思いに対してどのような関わりや支援が必要か保護者と共に考え、成長を見守っていく、そのような関係作りが大切であると考える良い機会となった。

北海道乳幼児療育研究学会会則

第1条（名称および事務局）

本会は、北海道乳幼児療育研究学会と称し、事務局を札幌協働福祉会たくあいアクティビティ「むら(夢)」内におく。

第2条（目的）

本会は、北海道における乳幼児療育の向上発展のために、関連諸領域における実践と研究の交流、および相互研鑽をはかることを目的とする。

第3条（事業）

本会は、前条の目的を達成するために、下記の事業を行う。

- (1) 研究発表大会の開催（年1～2回）
- (2) 研究誌の発行
- (3) 指定研究の実施
- (4) 各種研修会・研究会・研究事業への協力
- (5) その他必要な事業

第4条（会員）

本会は、北海道に在住する乳幼児の療育上の諸問題に関心を持ち、医療、福祉、保育、教育等の諸領域において、実践および研究に従事するもので、本会の趣旨に賛同するものをもって会員とする。

2.道外又は国外に在住するものであっても、理事会の承認をえて、会員とすることができる。

第5条（顧問）

本会は、顧問をおくことができる。本会の発展に貢献のあったもので、役員が推薦し、総会の承認をえて会長が委嘱する。

第6条（役員および監事）

本会は、次の役員および監事をおく。任期は3年とし、総会において決定する。ただし再任は妨げない。

- (1) 会長 1名
- (2) 副会長 若干名
- (3) 理事 若干名
- (4) 監事 2名

第7条（会議）

本会は、運営上の必要に応じ、下記の会議を開く。

- (1) 総会 定期 (年1回)。なお、会長が必要と認めるときおよび会員の3分の1以上の要請があった場合には、臨時総会を開催することができる。
- (2) 理事会 会の運営の方針および予算等の審議を行う。

第8条 (会 費)

本会の会員は、年額 2, 000 円を会費として納入する。

第9条 (経 費)

本会の事業に必要な経費は、会費、寄付金およびその他の収入をもってあてる。

第10条 (会計年度)

会計年度は、4月から翌年3月までとする。

(2024 年 10 月 6 日 第 38 回研究大会時総会)

<役 員>

会 長 佐々木 浩 治

副 会 長 扇 子 幸 一 田 中 康 雄

事 務 局 長 川 合 知 子

研 修 部 長 市 野 孝 雄

研 修 副 部 長 八 木 沢 博 光

研 修 部 員 愛 下 啓 恵 小 田 進 一 柿 原 勝
金 沢 俊 文 佐 藤 知 哉 玉 手 美 和 子
日 置 真 世 藤 坂 広 幸 細 谷 優 子
水 上 八 行 南 出 夏 美 横 井 裕 一 郎

編 集 部 長 中 村 孝 博

編 集 部 員 柿 原 勝 佐 々 木 浩 治 扇 子 幸 一

総 務 部 長 佐 々 木 順 司

総 務 副 部 長 橋 本 充 久 仁

総 務 部 員 柿 原 久 仁 佳 佐 々 木 美 春 美 馬 正 和
二 宮 翼 野 呂 朋 将 森 昌 司

監 事 北 山 竜 大 添 田 沙 樹

名 誉 会 長 伊 藤 則 博

編 集 委 員 伊 藤 則 博 齊 藤 真 善 佐 々 木 浩 治
佐 藤 貴 虎 扇 子 幸 一 本 間 尚 史
村 上 勝 彦 横 井 裕 一 郎

北海道乳幼児療育研究会事務局

〒002-8071 札幌市北区あいの里1条6丁目1-2

拓北・あいの里福祉センター 1F たくあいアクティビティ「むら(夢)」内 (担当 川合・添田)

TEL 011-770-5520 FAX 011-770-5521 E-mail t-kawai@sapporo-kyoudoufukusikai.jp

北海道乳幼児療育研究学会 投稿規定

本会機関誌論文は、大会発表を基に執筆していただきますが、原則的には独立した論文と考えています。

また、会員からの投稿を受け付けています。

以下の規定を参考に投稿をお願いします。

- 1 本誌は、北海道乳幼児療育学研究学会の機関誌として、原則年1回刊行する。
- 2 本会会員は、研究論文、実践論文を投稿できる。筆頭執筆者以外は会員外の連名も可能である。また、大会発表を基に執筆していただく際には、本会からの依頼のため、会員外でも執筆を可能とする。
- 3 投稿論文は未発表のものに限る。ただし、大会発表を基に執筆した原稿はその限りではない。
- 4 執筆にあたっては、別に定める執筆要項に従うものとする。
- 5 投稿論文の掲載の可否は、編集委員会の審査を基に編集委員長が決定する。その場合、原稿の修正を求めることがある。
- 6 編集委員会は、会員の中から会長が委嘱した編集委員を構成し、委員の互選で委員長を選出する。
- 7 編集委員は担当論文を査読し、編集委員会に査読結果を報告する。その場合、掲載の可否、および掲載に必要な修正について意見を述べるものとする。
- 8 編集委員会は編集委員の査読結果に基づき、掲載の可否を審査するものとする。その場合、必要に応じて編集委員以外の専門性を有する会員に意見を求めることができる。

執筆要項

【書き方】

- 1 本原稿では、発表を基にした論文ということで、文体は「～だ。」「～である。」調に統一を原則とします。
- 2 専門的すぎると思われる用語には、文中で説明するか、注記をつけてください。また業種だけで通用する略語は使わず正式名称で執筆してください。
- 3 文中で文献を引用した場合は、中村（2011）のように表記してください。その際は文末に引用文献を紹介してください。
 - ・文献が著作の場合 「執筆者」（発行年）「著作タイトル」発行会社
文献の紹介例→中村孝博（2011）「幼児のための障害児教育」明治図書
 - ・文献が論文の場合 「執筆者」（発行年）「論文タイトル」雑誌名及び巻号 ページ数
論文の紹介例→笠原嘉（1978）うつ病の小精神療法 季刊精神療法 4(2) 118-124

- 4 年号は西暦を用いてください。
- 5 数字は算用数字を原則として、半角で記述をお願いします。

原稿作成についてのお願い

ページ設定

1

MSワード MS 明朝 10.5ポイント A4版 1行全角 20文字×40行×2段

- * 飾り文字、網掛け、吹き出しなどの加工は使わないでください。
- * 他のワープロソフトをお使いの場合は、ご相談ください。
- * 巻末に様式のデータがあります。本データを使用して執筆をお願いします。

表・グラフ

2

* 直接、原稿に貼り付けてください。カラーでの掲載が可能ですが、プリントアウトした際の見やすさにはご配慮ください。(例:黄色の文字や絵が白く印刷されることがあります。図が小さいと判読できないことがあります)

なお、2段組の左右一方に収まらない場合、図表部分のみ 1段組にしていただくことは可能です。

* 操作の難しい方は、表・グラフは原稿とは別に送ってください。その際は、原稿内に表・グラフの位置を指定してください。

写真

3

* 原稿に直接入れるか、そのまま送っていただいても構いません。写真もカラーでの掲載が可能です。人物が映っている写真については、執筆者が肖像権の確認をお願いします。

* 絵や絵本、出版物などの著作権も執筆者で確認をお願いします。

ページ数 (大会の企画によって変更があります)

4

講演会 12ページ~20ページ...編集部でのテープ起こしも可能です。

交流型 トークセッション 1グループ 2~4ページ程度

分科会発表 1発表者につき 4ページ程度

座長 (講演会・グループセッション・分科会) 1ページ以内 「座長のまとめ」

投稿論文 8ページ以内

見出しと数字について

大見出し（MSゴシック 10.5 ポイント）

中見出し → 1. 2. 3. … （MS 明朝）

小見出し → 1) 2) 3) … （MS 明朝）

小見出し以下のものはなるべく使わないようにすること。

編集後記

会員の皆様はご存じの通り、会の収入減により、様々な業務を見直す中で、今回の紀要から業者を通さず、本会の編集部のみで作成しました。今後も本会を長く続けるためのとられた措置です。会員の皆様のご理解をお願いします。

これまではプロの編集者が一字一句丁寧に校正をしていただき、冊子の体裁や原稿のレイアウトもなどの作業も行ってくださいました。編集部は限られた時間の中での作業でしたので、プロの編集業者のような精密さは欠けております。それでも会員の皆様に喜んで読んでもらえるよう編集しました。

そんな中、執筆された皆様、本当にありがとうございました。慣れない編集作業にお付き合いいただき、何度も原稿を修正していただきました。改めて感謝申し上げます。

さて、今回投稿規定を掲載しました。先にも述べた通り、本会編集部での作業となりますので、編集作業の軽減と学会誌としての統一感を考慮してのことです。執筆者にはご負担をおかけするかと思いますが、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

今後もよい編集を目指していきます。本誌を読んでの感想やご意見がございましたら、事務局までお寄せください。また、編集作業は得意なのでお手伝いしたいという会員がおられましたら、ご連絡ください。一緒に編集作業を通じて本会の発展を目指していきましょう。

<2025年 夏 編集部長 孝>